607-56
1200501532667
607
56

5. 6.13

モルガノ王國

NHS

8 222

モルガンの王國

―弗資本の神々に就いて―

小島精一著

日本評論社版

昭和五年・日本・帝國圖書

607
~~608~~-56

小序

周知のやうに「弗(ドル)」は「磅(ポンド)」を壓倒して、世界經濟を支配してしまつた。ポンドもマークもフランも圓(エン)もすべてがドルの威力にせう伏してゐる。

弗(ドル)の動きは强烈な電波となつて世界財界の隅々まで震動させるのだ。だから此の弗(ドル)の動きこそ吾々――世界經濟研究者の最も中心的な眼目だ。

處が、その弗(ドル)はモルガンやロックフェラーといつたやうな極く少數の大財閥によつてしつかり支配されてゐる。

だから、弗(ドル)の動きといふのは畢竟モルガンやロックフェラーの動きに外ならず、彼等こそ直に全世界資本の覇王的支配者なのだ！

本書は此弗(ドル)資本の殿堂に踏み入り、短刀直入的にその神々の本體を白日下に暴露せんとする一企圖の――ほんの一部分を示すものである。

その主眼點は、本文冒頭のはしがきに述べてある通り、弗資本の寡頭支配化の發展とその内的連鎖の構成等を概觀するに止まる。

即ちどんな風にして、且つどんな大きさ迄、モンガンやロックフェラー等がその強大な王國を築き上げて來たかといふ問ひに答へるに止まる。

私は近々やはり日本評論社の「全集・アメリカ時代」の一篇として、「第二の産業革命」といふ別の物語りを發表することになつて居り、も早、大部分脱稿してある。

それは本書の姉妹篇で、そこで始めて獨占的大財閥の支配下に於ける弗(ドル)の躍動振りが語られる――就中最近の驚異的な繁榮經濟の眞相とか弗(ドル)の海外進出政策とかゞ主眼となるのだ。

一九三〇・三・二〇

小島精一

モルガン王國

目次

その一　弗資本の殿堂に就て……一

1　はしがき……三

2　金融(フィネー)トラスト――「トラストのトラスト」……四

3　證券制度の役割り……八

4　證券投資の獨占化……一〇

5　米國金融資本の史的役割り……一五

6　獨逸金融資本との對比……二〇

7　大金融資本網の構成……二五

8　モルガン團とキュン・ロエブ團……二九

9 金融的支配の便法とその「持株」……三四

その二　モルガン治下の銀行集中……三七

1 銀行資本の分散……三九
2 群小銀行の行き詰り……四一
3 英米大銀行の規模……四三
4 最近合同運動の主因……四六
5 合同運動の狀勢……五一
6 支店及び連鎖銀行運動……五七

その三　モルガンの鐵道征服……六三
——大鐵道業の金融資本化過程——

A 金融資本化概說……六五

1 鐵道支配の重要性……六五
2 初期鐵道業の投機性……六七
3 鐵道利權と官權買收……六九
4 景氣の激動と產業の發展……七一
5 鐵道建設の動き……七三
6 鐵道業の大結合期……七五
7 金融資本化の役割り……七七
8 大鐵道系統の鳥瞰……八〇
9 モルガンとキュン・ロエブ……八一
10 世界大戰前後の金融資本……八四
11 持株組織の例證……八七

B ヴァンダビルト・グールド時代……九三
12 一八六〇年のモルガン家……九三

13 南北戰爭後の大鐵道熱……九六
14 投機者に食ひ荒されたイリイ會社……九八
15 ユニオン・パシフィックの背任事件……一〇〇
16 モルガンとアルバニイ事件……一〇三
17 最初のシンヂケート運動——クーク商會とモルガン……一〇五
18 クーク商會の沒落……一〇六
C 巨人鬪爭時代……一〇九
19 國際金融家の擡頭……一〇九
20 恐慌期の鐵道業……一一四
21 新投機戰略——巨人鬪爭時代……一一七
D 金融資本の支配……一二二
22 モルガンの大進出始まる……一二二
23 プールから大合同へ……一二四

24 金融資本の統制なる……一二七
25 ヒル、ハリマンの對立と金融資本……一二八
26 ハリマン鐵道王國の組織……一三三
27 金融資本團の分野……一三六
その四 重工業の收奪……一四一
A 無煙炭田の收奪……一四三
1 大鐵道と炭坑との結合……一四三
2 鐵道・炭坑會社のプール統制……一四四
3 モルガンのリーヂング線奪取……一四五
4 全炭田の集中的支配……一四七
B 大鐵山の奪收過程……一四九
1 シューペリオル湖鑛山の開發史……一五〇

2 湖鑛事業の金融資本化過程……一五三
3 一八九三年の大恐慌とロックフェラーの收奪……一五四
4 カーネギーの進出とロックフェラー國……一五六
5 モルガン系の進出……一五八
6 ユー・エス・鋼鐵トラストの出現……一六一

その五　ユー・エス・スチール・トラスト……一六五

1 八十年代の鐵鋼業……一六七
2 九十年代の結合・集中運動……一七〇
3 粗材會社と加工會社との對立——その財閥關係……一七三
4 「巨人鬪爭」の危機——モルガンの立場……一七六
5 綜合的大トラストへの結成……一七九
6 ユー・エス・トラストの組織……一八〇

7 大金融家モルガンの役割り……一八三
8 モルガンの莫大な發起利得とトラストの「水增し」……一八六
9 競爭と獨占……一九四

その六　スタンダード・オイル……一九七

1 ロックフェラーの石油事業……一九九
2 スタンダードの獨占過程……二〇〇
3 最初のトラスト組織……二〇三
4 第二次トラスト組織——持株會社……二〇五
5 第三次トラスト組織——コンツェルン形體による支配……二〇七
6 大戰後のスタンダード・コンツェルン……二〇八
7 法外な獨占利潤……二一一
8 世界的資源の奪取へ……二一四

9　石油から全部面へ！……二二六

その七　アナコンダとガッゲンハイム……二三一

1　合同銅とロックフェラー一味の惡辣な「操り」……二三三
2　アナコンダ・トラストの成立……二三五
3　アナコンダの世界的進出……二三七
4　モルガン――ガッゲンハイム系コンツェルン……二三一
5　世界的カルテル運動……二三五

その八　ジェネラル・エレクトリックとウェスチングハウス……二三九

A　電氣時代の展開……二四一
1　電力事業……二四一
2　電機器工業……二四三
3　電氣資本の大結合と世界的進出……二四五
4　ジェネラル・エレクトリック（G・E・C・）の世界征服……二四七
B　モルガンの電氣業征服……二四九
5　モルガン進出以前――三社鼎立時代……二四九
6　モルガンの進出――ジェネラル・エレクトリックの成立と發展……二五一
7　ウェスチングハウスと金融資本……二五四
8　G・E・の持株支配網……二五七
9　G・E・の全國的統制圏……二五九
10　G・E・の世界的制覇……二六四
11　ウェスチングの海外進出……二六七
12　電信電話事業の支配……二六八
13　ラヂオ工業の支配……二七一

その九　ジェネラル・モータースとフォード……二七三

1 自動車工業の發展……二七五
2 大經營・大企業・企業集中……二七六
3 自動車會社の資本的膨脹と特殊利潤の再投資……二七九
4 自動車工業と金融團……二八二
5 第一次ジェネラル・モータース……二八五
6 フォードの發展……二八八
7 デュ・ポント團のジェネラル・モータース收奪……二八九
8 モルガン團の進出……二九二
9 最近のジェネラル・モータースとフォード……二九三
10 自動車工業の競爭と獨占……二九六
11 特殊高率利潤とその低下……二九九
12 內地市場の飽和と海外進出……三〇一

その十　デュ・ポント・コンツェルン……三〇五

1 化學工業の發展……三〇七
2 大火藥王デュ・ポント團……三〇八
3 世界大戰とデュ・ポント……三一〇
4 デュ・ポント・コンツェルンの烏瞰……三一二

その十一　世界的農具トラストその他……三一七

1 世界的農具トラスト……三一九
2 大機械會社……三二三

その十二　國際海運トラスト……三二七

1 國際海運トラスト……三二九
2 海運トラストの失敗……三三三

その一　弗資本の殿堂に就て

1 はしがき

モルガン王國などと言つてもモルガン家の系圖調べや個人的傳記や財産調べ等に沒頭しようとする氣ではない。たゞ、モルガン王國を中心として弗資本の殿堂を――米國金融資本の發展過程を考察してみようとするだけである。

米國の金融資本は今や全世界資本の征服者であり、モルガン王國は正に世界資本の最大の指導者となつてゐる。現に戰後の世界資本の行き詰りと崩壞は弗資本によつて――それ故、又モルガン王國によつて救濟され、その指導の下に着々と安定をとりもどし、復興の途を辿ることが出來たのだ。

今後の世界救濟は、弗資本の――それ故、モルガン王國の指導政策如何によつて至大な影響を受けねばならぬ。例へば、世界的金本位の支持は弗資本の寛大な金融政策なくしては直に挫

折せざるを得ないであらう。國際貿易は弗資本の寛大な對外貸付けなくしては直に萎縮してしまふであらう。賠償問題の折衝は弗資本の寛大な支拂ひ延期を前提とせずには直に行き詰つてしまふであらう。等々…

かゝる狀勢の際、米國金融資本の發展過程を檢討し、その内的機構を明にし、その産業政策を研究するのは、多大の興味を惹かずにはゐないだらう。

だが、冗漫な序文は切斷して、直に本論に入らう。

先づ差し當りは、米國金融資本の特性・その組織等の一般的概説から始め、進んでモルガン王國を中心とした發展史の叙述に移るつもりである。

2　金融（マネー）トラスト——「トラストのトラスト」

後に、追々説明するやうに米國では今から約半世紀程前頃から謂ゆる獨占資本期の段階に移り行きつゝあつた。そして一八八〇年代——九〇年代と確實に前進して、本世紀の初頭には全

く高度の爛熟期的段階にまで進んでゐた。獨占體は、スタンダード・石油トラストやユー・エス・鋼鐵・トラストや銅や農具や砂糖やタバコや電信・電話や靴や電氣や、更に又、かの厖大な鐵道業や海運業や等々…その他殆どあらゆる重要部門に亙つて確立され、國民大衆は全くその「冷酷な」飽くを知らざる搾取の網の中に「捕り込められてしまつた。」

それで此獨占網を打破しようとして自棄的な國民運動が起つたが、それは結局失敗の繰り返しに終つた。——とりわけ、最初の十數年間は最も無效果な慘敗に終つたが、それは一つは彼等が獨占的魔王の本體を理解してゐなかつたゝめでもあつた。換言すれば、彼等は個々の産業的獨占體あるを知つて、全獨占網を統括する「トラストのトラスト」あるを充分認識しなかつた。たとひ、漠然と氣付く者はあつても、充分此の全面的統制の内的機構を把握する者は少かつた。否、把握する者はあつても、此の全面的統制の王城めがけて征矢を打ち込む者はなかつた。個々のトラストの破棄を命令する判決は屢ゝ現はれたが、此の全面的トラストには一指も染められなかつた。だからそれは結局無效果に終つた。

此の全面的トラストこそ實に私の當面の主題とする金融トラスト——謂ゆるマネー・トラス

トであり、モルガン王國こそは此金融トラストの支配を通じて、全産業界にその統制的觸手を擴充させてゐるのである。

然し、遂に暴露の時機が來た。一九一二年に「トラスト掃滅」の峻嚴な旗幟を眞向にかざして、凱歌を奏することが出來た民主黨――その首領ウィルソンは徹底的トラスト征伐の最初の企圖として、いしくも、始めて、此金融王國の徹底的な内情摘發を實行せしめたのである。(ピュージョ委員會の任命。)

これより先き、ウィルソンの發表した宣言書の中には「一の見えざる帝國が民主政治の形式の上に築き上げられ、全國民は冷酷な一大經濟網中に捕り込められてしまつた。」此恐るべき禍根を追求すれば金融トラストの張り廻した蜘蛛手の魔力の作用に外ならない。「凡ゆる大獨占の本體こそは金融トラストである。……全産業界は信用網で支配され、その信用組織は強く集中されてゐる。そのために、國民的發展、否吾々の全活動は此少數の支配者に左右されてゐる。そして彼等は個性として假令如何程善良でも、その投資事業の利害を中心に行動しない譯には

行かず、從て、必然に經濟的自由を拘束せざるを得ない。これこそ問題の最大の禍根であつていやしくも人民の將來とその眞實の自由とに奉仕せんとする政治家は一大勇猛心を以て此魔城征伐に立ち向はなければならぬ」……とあつた。

ピュージョ委員會――此官設委員會の報告の中にも「從來産業界の競爭排除として起つた、どんな危險にもまして、遙に危險なのは、これらの少數者の銀行及び工業支配を通しての、信用の統制である。……少數團が相變らず支配を支持する限り、通貨制度を改善して、銀行の資源を大にし得るか否かと言ふ問題の如きは寧ろ末梢的な意義しか持たない。……今日の如く、資金調達と證券大量發賣のあらゆる便宜とが、これらの少數大金融團一味の掌中に把握されてゐては、競爭を厲行することは不可能だ。……彼等はどんなトラストにも增して競爭を徹底的に破壞してしまふ。と言ふのは、彼等こそ、その支配下に屬する各部門内の潛在競爭のその核心を打破するから。……」と言つてゐる。

では如何にして彼等はかゝる絶大な威力を克ち得たのか？　それを語るために、私は一應現代産業金融の構成に觸れておかう。

3　證券制度の役割り

現代産業金融の特性は單にその授與する金額が莫大なだけではなく、それが著しく固定的―長期信用的であることだ。之は言ふ迄もなく現代産業技術――大規模な機械的設備の發展の必然の要求に基く。

此長期的な、固定的な、大量信用の要求に順應するために資本家は證券制度を案出し、その巧緻な仕組みによつて、全社會的蓄積を吸收し乍ら、然も全財團の支配力は飽く迄自己の掌中にしつかと確保するに成功した。株式會社制の史的意義は實に主として此點に觀取されねばならぬ。

換言すれば證券化による資本の動員によつて、

(1) 一方には、社會の各方面に分散してゐた少額の資金が集中されて容易に巨大な單一財團として利殖の途に就き得るやうになり、大資本調達の便宜が開けるが、

(2) 他方には、かくして集中された全財團の支配權は、も早、個々の、小額所有者から分離して、極く少數の指導的大資本家の掌中に把握されるに到る。小額投資家も、成る程、形式的には株主として企業統制に參與し得るやうではあるが、實際には彼等の位置は、も早、企業の內部所有者と言ふよりは外部債權者――或は産業企業家と言ふよりは、單なる貸附け資本家に引き下げられてしまふ。その代り、彼等は企業の實際の管理に少しも參與せずに、每期殆ど正則的に利益の配當を享受することが出來る。他方、企業の全管理權は少數の指導的大資本家に委託され、此の少數者こそ現實には專斷的に全財團を統御して行くのである。

かくて、此證券化の發達は小資本家にとつてもその資産の有利な利殖の途を開き、企業の實情を熟知せずとも、又企業の管理に參與せずとも、企業の利潤を享樂せしめ、又、かく、長期投資として一旦資本を固定化せしめ乍ら、必要の際は、何時でも隨意に、その持分を轉賣して現金に還元する途をさへ打開せしめたが、それと同時に有力な大資本家にとつては散在せる社會的蓄積を吸收して、之を專斷的に行使し、ヨリ遙に有利なる利殖の用具に供する便法となつ

たのである。

分散せる小資本にはその有利な利殖の機會を開き、それによつて大企業にはその資本調達の途を開き、大資本家には莫大な他人資本に對する專斷的處分權を與へたのである。

上述せる金融トラストの絶大なる威力は、實に此の證券化による他人資本の統制の仕組みに依存するのである。

では、その過程は？

4　證券投資の獨占化

かくて、證券化の發達は大資本調達の便法を打開したが、それが圓滑に利用されるには、そこに適當な專門的仲介者が必要となる。現代金融業者及び證券業者・投機業者等の特殊な一つの役割りが、こゝに與へられねばならぬ。

と云ふのは、工業會社はその大量資金を調達するためには先づ分散し、睡眠せる貨幣を目覺めさせ、之を蒐集せねばならない譯である。だが、一般世人は財界の實狀に慣れず、又投資の選擇能力をも持たないから、適當な專門家がそれを勸誘しない限り、自ら進んで工業企業等に投資することは稀であらう。又會社にしても一々かゝる小額の資金を勸誘して巡廻することは到底その煩勞に堪へぬであらう。そこで必然に證券投資には專門的の仲介業者が發生し、(1)一方にはその專門的知識を一般民衆のために働かせて適宜な投資上の指導者又は受託者となり、(2)他方には工業會社のために纏つた資金の調達上の代辯者となるに到るのである。卽ち休息貨幣は此仲介者によつて惰眠から、たたき起され、蒐集されて、適宜な工業企業家の手に引き渡され、その資本的役割を附與されるのである。

こゝで注目すべきは、これらの仲介者中には單に證券發行手續きの事務的仲介を行ふだけの者ばかりではなく、自己の名で、證券投資を實行する者が重要な位置を占めてゐると言ふことである。例へば大銀行、信託會社、保險會社等はその事業の性質上巨額の他人資本を一手に集中して、保管し、然も全く自己一存的に之を適宜の證券に投資して利殖を企圖するのである。

かゝる巨大な他人資本の貯水池が實際どんな支配的役割りを振舞つてゐるかを知るには、現に米國で巨額な長期資金が、どんな風に、調達されてゐるかを例證するがいゝだらう。

そこで、次に大工業證券――株券又は債券の――發行方法を簡單に説明してみよう。

例へば、紐育で大工業會社が巨額の證券を發行すると考へよ。大工業會社は一定の條件で此發行事務の一切を專門的な大發行業者――卽ち大投資銀行乃至大銀行に委託する。後者はその一味の同業者達と協働して引受シンヂケート團を組織し、その中最も有力な投資團がそのマネージャーとなる。こゝで、彼等は工業會社の要求するだけの全證券を直に一手で引き受けて購入する。卽ち彼等はその厖大な資力――それは上記の如く多くは他人資本の集中的保管に過ぎないが――を以て、一先づ、卽座に全證券を成立せしめて、工業會社に所要の資金を供給する。そして、自ら此の證券の獨占的元賣捌者たる位置を把握する。

かうして元賣捌者が引受をなし更に之を公衆に賣捌かうとすると、彼等は地方的發行業者とシンヂケートを組織するか又は下引受をなさしめ、これらの全國的組織を通じて各地方へ分散せしめる。地方的證券問屋は勿論更にその下にある小地方銀行、證券業者又は仲買人等々に適

宜に分散せしめる。一番底には多數の小賣業者があつて、直接に小投資家と接觸して、その最後の賣捌きに當る。此の全國的組織網の構成は國によつて一樣ではない。(イ)獨逸では大銀行自身の支店及び出張所網が完備して居り、元賣捌から小賣りまで終始一貫して之に當るのであるが、(ロ)英國では各地の仲買人及び銀行支店等が投資家の註文を引き纏める役目を果し、(ハ)佛國では元引受は特殊の證券銀行が、行ふが、下級の小賣は預金銀行の完備せる全國的組織網に依賴してゐる。(ニ)米國でも從來元引受は主として、投資銀行家 (Investment Bankers) と言ふ特殊の證券投資專門の大金融業者があつたのであるが、近頃では普通の大銀行や信託會社も之に參與するやうになつた。

が、何れにせよ、此證券引受業者はその厖大な資力の必要のために、特殊の獨占的威力を持つて居り、これらの極く少數者は――現在米國では、此元賣捌者たり得る者は僅々數個の大財團に限られてゐる――謂はゞ社會資金の總取締りの位置を占めてゐるのである。

だから、此の特殊の獨占的位置を利用して彼等が、此の引受業務から法外な高率利得を搾取してゐることは言ふ迄もない。

(1)彼等は先づ證券を發行せんとする事業會社から莫大な報酬を强要する。

(2)彼等はその引き受けた證券を一般市場に賣却する際に、その價格を釣り上げるために、絶大な掛け引き的威力を振ふ。

(3)のみならず、彼等は證券發行の機會を利用して、工業會社の支配權に侵入し、之を繼續的に自己の利殖上の道具化することが出來る。工業會社の側では資金調達上の便宜が彼等との結合を歡迎せしめる。少くも、此侵入の前には多くは無抵抗ならしめる。

だが、かくの如く、投資銀行家が法外な利得を搾取すれば、その搾取額だけは、必然に工業會社の負擔を加重する。それは主として工業會社の資本の「水增し」的膨脹となつて表はれる。が、結局、商品の價格を釣り上げて消費者の負擔に轉嫁される。

此消費者への轉嫁が充分、成功するためにはなによりも競爭は邪魔物である。競爭排除——獨占化への一つの强力な拍車が、かくて、投資銀行家の側からも加へられる。否、之が多くは結合と獨占とへの最後の仕上げを促進するのだ。

5　米國金融資本の史的役割り

と、言つたからとて、企業の集中と獨占化とは勿論、投資銀行團の强要だけで發展するものではない。

分り切つたことだが、現代技術の發展は大企業化を要求し、生産力を擴大し、必然に、激烈な競爭戰を生む。競爭は單に激化するだけではなく、著しく執拗化する。のみならず、そこには又必然に大規模な、恐慌的混亂が頻發するやうになり、そのためにも競爭戰は愈ゝ激化し、それは又逆に市場の混亂を愈々深刻ならしめる。

此の混戰狀態は、差し當りは、各生産者をして夫々その戰鬪力の强化を努めしめ、それによつて對手を屈服して競爭場裡の勝利者たらんと企圖せしめるであらうが、然し、その結果は劣弱者をこそ沒落せしめはしても、競爭その者は決して緩和せられない。否、存續した少數大企業者間の鬪爭こそはその激度に於て、從前のそれより遙に强烈となる。そして、結局競爭の當

事者は何れも夫々疲弊してしまふだけだ。

そこで、彼等の間には必然に競爭その者を排除し、相互に妥協して、平和的に獨占市場を享樂せんとする熱望が生じる。かくて、競爭はそれ自體自壞して、獨占に轉向する。

だから、結合と獨占とへの要求は大企業化が或程度の成熟期に到達すれば、産業當事者間に必然に發生する熱望ではあるが、それは、大金融業者の介入によつて更に著しく强化されるのである。のみならず、その實現には大金融業者の援助に俟つ處甚だ大なのである。

現に米國の資本主義發展史上に於てモルガン財團の特殊の史的役割りは實に此大獨占化の促進と完成とを中心として居り、そして彼の一味が、今日全資本主義的支配權を把握するに到つたのも全く、此獨占化運動の指導的役割りのためである。

此點、例へばヴアンダービルト、グールド、ロックフェラー、ハリマン、ヒル、カーネギイ、シュワップ、フォード等々…の群雄的大産業家と異つて、特にモルガンに綜括的大指導者——最高の覇者の位置が與へられた所以である。

先代モルガンは常に平和的、協調的、結合的政策を提唱し、獨占化の完成に沒頭したが、之

は必ずしもモルガン個人の人格的性癖のためではなく、實に一般投資金融業者の聰明なる合理的打算を代表するものに外ならないであらう。なぜと言ふに、

(1)平和的協調によつて投資金融家の關係せる大産業會社は何れも高率な利潤を享樂すること が出來るし、

(2)投資業者は新結合のためにする證券發行によつて特に莫大な發起利得を享樂し、産業會社への支配的侵入を一層深化せしめることが出來るから。

實際かゝる發起利得が如何に法外に莫大なものであるかは、後に多くの實例によつて例示することにしよう。

前にも一言したやうに米國の獨占資本期は前世紀の八〇年代から始まり本世紀の初頭に一應その絶頂に到達した。そして、モルガン團その他の大投資金融團の産業界への侵入運動——その作用の結果としての金融業と産業との大規模にして緊密な内的連鎖網の出現も亦必然に之と時期を同じくして居る。例へば…

(1)大金融業者の本據たるウォール街の狼共が始めて產業投資に着眼したのは實に一八七〇年代のスタンダード石油トラストの刺戟によると言はれる。

(2)最初の大產業投資は厖大な鐵道事業の建設とその大結合化に向けられたのだが、然もモルガンが此領域への徹底的侵入――その獨占的結合政策への最初の出發は一八八五年以來のことである。そして、その稍や大規模な成功を克ち得るに到つたのは九〇年代以後のことである。

(3)鐵道に次ぐ、然も、未曾有の大獨占體たる鐵鋼業トラスト化の出現は一九〇一年であり、此領域へモルガン團が侵入したのは一八九八年にフェデラル・スチール會社を創立してカーネギィと對峙した時からである。

(4)その他モルガンの大海運業トラストが成立したのは一九〇二年のことであるし、

(5)電信、電話、農具機械等の注目すべき大トラスト化は何れも世紀の轉換前後のことであり、電氣事業界へは比較的に早くから侵入したが、それも注目すべき大結合體となつたのは一八九二年にジェネラル・エレクトリック會社を創立してからである。

(6)自動車工業の如きは世界大戰後に始めてジェネラル・モータースの支配權を把握したのである。

かく概觀し來ると米國金融資本史の全過程に於て次の一般的結論が抽き出されるであらう。――即ち、今日堂々たる大產業を構成せる諸部門は何れもその創業的時代には純然たる產業企業家の現實の支配の下にあつて、金融業者は殆ど之に關與して居らず、それが、幾多の創業的苦難を經過し、恐慌の激浪に弄ばれながらも、漸く事業の基礎工事が築上され終り、前途の發展の見込みが確實になると始めて金融資本の猛然たる侵入が行はれる。そして侵入の導因となるものは或は(イ)劃期的飛躍のための大資本の必要(創業的企業は大抵微小な規模である)か、(ロ)大勢としては極めて有利でありながら、創業期的動搖のために一時的行き詰り(それも主として豫備的資本の不足からくる。創業期には有利なら、有利な程、利潤を擴張のために、再投資して手持ち遊金に乏しいのを普通とするから)に陷落してしまつたものを救濟し、再組織するためか、或は(ハ)好況に乘じて擴大された過剩能力を整理し、大結合體を組織して獨占的安定の途を打開せしめるためか等…である。

何れにせよ、創業的企業は、多くは鬪ひ疲れて、その辛苦の結晶を法外な廉價で大金融團に奪

取されるか、偶々、一見有利な條件で取引したやうな場合にも、稍や長い眼で見れば、創業期には想像も出來ぬ程莫大な獨占利潤の源泉を大金融團に割安に讓渡したことになるのを普通とする。

而して、此の大金融業的侵入の最初の劃期的躍進期こそ前世紀末から本世紀初頭へかけての十數年間であつた。

6　獨逸金融資本との對比

金融資本化――獨占化の發展に於て米國と對比されるのは獨逸であるが、此兩者の間には多少の相違がある。

(1)先づ金融資本の史的役割りの上で。――卽ち米國では上述の如く大金融團の産業統制は既に産業資本が充分確立された後ちに屬するが、獨逸では、それは謂はゞ産業資本の創立期から始まる。それ處ではない。獨逸輓近の大重工業等は殆ど全くその大銀行團の投資によつて始め

て確立されたのだ。それだから、大銀行團は、大工業の創業期から、緊密に之と結合し、且つその發展を助長し、又之を强く支配して來た。

然るに、米國では上述の如く、大金融團の産業支配は、産業資本の確立し終へてから十數年後或は二、三十年後のことに屬する。

恐らく、此兩者の相違は兩國の自然環境の相違に依る處が少くなかつたであらう。と、言ふのは、米國でも獨逸でも産業資本の確立と成長とは急速且つ大規模には行はれたが、米國では、獨逸と異つて、その廣大、豐饒な自然的資源を開發しつゝ、短年月に莫大な資金を蓄積することが出來、從て、獨逸よりも産業資本の自立的發展の可能が大であつたらうから。例へばロックフェラーの石油事業に於ける、カーネギイの鐵鋼業に於ける、ヘーブマイヤの砂糖業に於ける、ヴアンダービルト、グールド、ハリマン、ヒル等の鐵道業に於ける、近くはフォードの自動車に於ける如き、何れも初めは微小な資金で出發し乍ら、短年月の間に獨力、驚嘆すべき巨富を蓄積した例證に外ならぬ。

(2)右の事實から、更に大金融業と大工業の爭覇上の相互關係が獨逸と米國とでは、かなり相違するらしい。

獨逸では大銀行業者は大工業に對して絶大な支配力を把握してゐたことは上述の關係から容易に推察される。が、米國では常に必ずしもさうではないらしい。

成程、モルガン團やキューン・ロエブ團やナショナル・シチィ銀行や紐育第一國立銀行等の有力な大金融團は多くの大工業に對して、偉大な統制力を持つてはゐるが、他方、彼等は上記の大鐵道王や大工業王等に對しては必ずしも威壓的支配の態度をとることは出來ず、寧ろ逆に後者こそ大金融團の領域へ侵入して、それを支配することが少くなかつたらしい。

換言すれば、米國では大金融團以外にも大鐵道及び大産業の領域に固有の大産業資本家が發生した。そして、彼等は或程度の成長を遂げると、やがて、必然に大金融業の領域にも侵入して行かざるを得ない。と言ふのは、も早自己固有の領域だけでは有利な新投資の機會がなくなり——そしてトラスト化は此の新投資の、機會を減殺することを注意せよ——從て、必然一般的投資の廣き領域への接觸を求めて金融業に侵入してくる。こゝで、彼等は大金融業と結合し、

後者の基礎を著しく擴大し、强化し、融合的大金融資本として更に前進する。

かくして、例へば既に一九〇二年にはロックフェラーは十一個の大工業會社と九個の大鐵道を支配する外に、八個の大金融會社に參與してゐたし、ハリマンも三十個の交通業を支配する外に七個の金融會社に參與してゐたし、五十八個の鐵道及び工業會社を支配するデピウも亦九個の金融會社に參與してゐた。

一九〇一年のエコノミストに載せられた次表も、亦興味ある此關係の一斑を例示するであらう。

	鐵道支配	同銀行	工業トラスト	合計
(1)スタンダード石油(ロックフェラー)グールト、ハリマン聯合團	一、九九七百萬弗	八五	七四六	二、八二八
(2)モルガン團	一、六九一	一二二	一、六七七	三、四九〇
(3)ヴアンダビルト團	七五三	一二	一〇	七七五
(4)ペンシルヴアニア鐵道團	八七〇	—	三〇	九〇〇
計	五、三一一	二一九	二、四六三	七、九九三

ホブソンも註記してゐるやうに此粗雜な計算に對する主たる興味は當時のトラスト經濟に於ける重點の所在にある。

(3)とりわけ莫大なる鐵道業が遙に他群を拔いて全資本構成上の最大重點をなしてゐることは獨逸の金融資本の構成とは、全く異つた一特性を示すものである。獨逸では、周知の如く此領域は早くから國有化されて居り、從て大資本團の致富の源泉とはなつてゐないから。

處が米國では正に此鐵道開發こそ最初の且つ最大な致富の源泉なのであり、此領域の支配者こそ、又他の全領域に向つてその支配權を振ふことが出來たのである。假令、石油業でも、大鐵鋼業でさへも、それだけでは決して全金融資本的支配權を把握するに足らない。たゞ大鐵道業の充分堅固なる統制權を土臺としてのみ、此の覇權は期待され得る。それ故、必然に大資本團の爭覇は此領域に於て最も差し迫つた緊張を示した。私は後章に於て、此爭覇過程を稍や詳しく語らう。

(4)尙ほ、一言附記するならば米國と獨逸とでは大金融團の形體上の相違がある。獨逸では普

通の大銀行が謂ゆる兼營銀行として證券投資の領域をも支配してゐるのであるが、米國では、形式的には普通銀行と證券投資銀行家とは一應區別される。例へばモルガン商會とか、キューン・ロエブ商會とか、ドレキセルとか、リー・ヒッギンソンとか、キッダ・ピーボディとか……は何れも投資銀行家である。又此外に信託會社や生命保險會社が夫々證券投資家として重要な位置を占めてゐる。が、ナショナル・シチイとか第一國立銀行(紐育)とかは謂ゆる普通銀行で商業金融を主眼とする。

だが、實際は決して、かう明劃に職能が區別されてゐる譯ではない。殊にナショナル・シチー銀行や第一國立銀行の如き有力な普通大銀行も近來は盛んに證券投資に進出してゐるし、又これらの諸領域の機關相互の間には緊密な結合網が敷設されてゐるのだ。

だから、此相違は甚だ末稍的なものである。

7　大金融資本網の構成

ピュージョ委員會の報告によつて米國大金融資本網の構成を概説しておかう。

上述によつて大體知られるやうに

(1)支配の中心機關は投資銀行である。

(2)が、それは一方に普通大銀行、信託會社、生命保險會社及び諸證券業者と結合して居り、これらの諸機關から投資基金を吸收し、又彼等を通じて證券の販路を確保する。即ち、彼等は社會資金の吸收機關であり、證券發行、分散上の販賣機關でもあり、又證券の大購買者でもある。

(3)他方、大鐵道、大事業會社とも緊密に結合してゐる。そこで證券の大量製造の機會が把握されるのだ。前述の如く、これらの產業會社は大投資銀行家との結合によつて、始めて大資本調達上の便宜を、――證券發行の便宜を確保出來るのだが、投資銀行家側から見れば、此の結合こそ發起利得の源泉となるのである。

かくて、大投資銀行團は謂はゞ同時に證券製造者とも、證券購買者とも結合して居り、一方から安値に買つて、他方で高値に賣り放つ豐富な機會を兩手に確保してゐるのである。

そして此操作を通じて莫大な利得を搾取するのであるが、此の獨占的利得の根源は主として他人資本――巨大な金額に迄集中された他人資本に外ならないのである。

次の假例は凡そ大金融資本網の作用がどんな過程を通過するものかを想像させるに恰好だらう。

(イ)モルガン商會がその支配下にある紐育・ニュー・ヘヴン鐵道をして社債を發行させる。モルガンは此鐵道の重役會を支配してゐるから、勝手に好都合な發行時機と發行條件とを選擇することが出來る。

(ロ)モルガン商會は之を引受けるための資金をその支配團中のギャランチイ・トラスト會社から借入れる。

(ハ)かくて引受けた社債は、同じ系統内の生命保險會社へ賣却することが出來る。

(ニ)鐵道會社は此社債でやはりモルガン系のユー・エス鋼鐵トラストから軌條を買ふ。

(ホ)ユー・エス・トラストは同じ系統のジェネラル電氣から電氣と機械を買ふ。後者は前者から鐵材を買ふ。等々・・・

(ヘ)これらの諸取引に必要な資金は時々モルガン商會から證券を發行してもらふ。

(ト)すべての關係會社はその遊狀資金をモルガン系の諸銀行へ預ける。資金がそこに集中する。これは更に外部征服のためにも用ひられる……。

結局、かゝる莫大な取引上の操作が、も早、實際は同一系統財團内部の單なる帳簿上の貸借だけに轉化してしまつてゐる。然も、それによつて、全領域の各會社が何れも巨大な獨占利潤を收めてゐるのであるが、之は全くこの厖大な領域を取り圍む外圍から、巨大な搾取が行はれるからに外ならぬ。

即ち鐵道や工業會社は高き獨占價格によつて、銀行は高き貸付利子によつて、證券發行者は高き發行價格によつて。等々……。

最後に、金融資本網の一鳥瞰圖を引用しておかう。即ち、次頁の圖表は一九二〇年に上院議員ラフォレットが金融トラスト攻撃の資料として使用したもので、中央列にモルガン商會、ナショナル・シチィ銀行、第一國立その他の大金融團が、左翼に大鐵道會社が、右翼に大鐵道と關連せる鐵鋼及び機械會社が配置されて居り、中央から放射する條線によつて金融資本網的連

絡が示されてゐる。

吾々は之によつて金融資本網構成の一斑を推察することが出來る。

8　モルガン團とキューン・ロエブ團

全金融資本網の中に覇者的優位を占めてゐるのは、周知の通りモルガン及びその結合團と、ロックフェラー・キューン・ロエブ結合團とである。

試に此の兩財團の主要領域に於ける對陣を表示すると……

第一　モルガン及びその結合

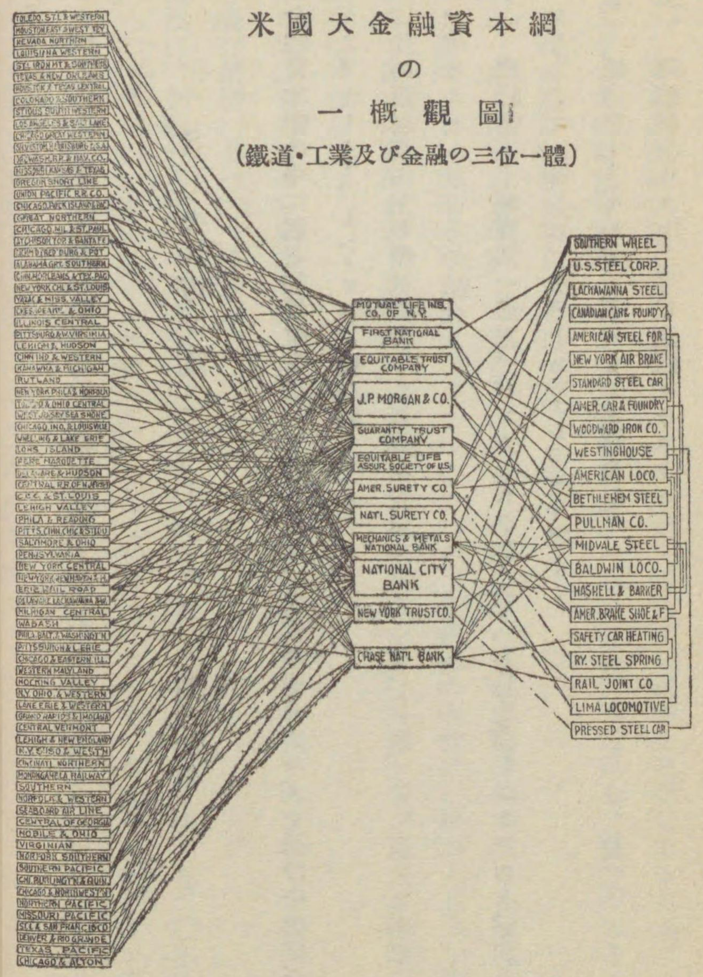
(イ)　銀行業――紐育第一國立、バンカース・トラスト、ガランチー・トラスト、ナショナル・バンク・オブ・コンマース、チェース・ナショナル等……

(ロ)　鐵道業――モルガン系、ヒル系諸會社

(ハ)　鐵鋼業――ユー・エス・鋼鐵トラスト

米國大金融資本網の一概觀圖

（鐵道・工業及び金融の三位一體）



（註）線條の種類は結合關係の深淺を示すものであるが、こゝには、それに立ち入る必要はなからう。

（ニ）石油業――シンクレーア・コンソリデーテッド

（ホ）銅及諸金屬工業――ガッゲンハイム

（ヘ）海運業――インタナショナル・マーカンチル・マリン

（ト）化學工業――デュ・ポント

（チ）自動車製造業――ジェネラル・モータース

（リ）電力及電機工業――ゼネラル・エレクトリック、等々・・・・

第二　ロックフェラー――キューン・ロエブ商會

（イ）金融業――ナショナル・シチー・銀行、インタナショナル・アクセプタンス・バンク等等々・・・

（ロ）鐵道業――ロックフェラー系、グールド系、ハリマン系等・・・

（ハ）石油業――スタンダード・オイル・トラスト

（ニ）銅及諸金屬工業――アナコンダ

（ホ）海運業――ハリマン團

（ヘ） 電力及電機工業――ウエスチング・ハウス等々々…

勿論かうした結合關係は絶えず動搖してゐる。

現に戰前にはキューン・ロエブ系と緊密に提携してゐたと言はれるナショナル・シチイ銀行は最近には寧ろモルガン系と、より親密な結合をなすらしい。

ピュージョ委員會の報告によるとモルガン商會、ナショナル・シチイ銀行、紐育第一國立の三者は緊密に結合して謂はゞ三頭支配をなして居り、此の三頭支配の領域は實に次の如き厖大さに達してゐると言はれる。

（イ）金融業――三十四會社、重役會議席百十八個、支配する總資産二十七億弗。

（ロ）交通業――三十二會社、議席百〇五個、總資本百十八億弗、鐵道哩數だけで十五萬哩。

（ハ）商工業――二十四會社、議席六十三個、總資本三十三億弗。

（ニ）公益事業――十二會社、議席二十五個、總資本二十二億弗。

（ホ）合計――百十二會社、重役會議席三百四十一個、總資本（又は總資産）二百二十二億弗。

然も之はたゞ主要會社の分だけで、決して全支配を網羅するものではない。

同じ報告によれば主要中心地に於ける此三頭結合體以外の主なる大金融團とその支配關係は次の如く要約される。

（イ）紐育――こゝでは勿論此三頭結合は絶對的支配力を持ち、ナショナル・バンク・オブ・コンマース、チェース・ナショナル、ギャランチー・トラスト、バンカース・トラスト等が彼等に隷屬する。又キューン・ロエブ商會の如き拮抗的大勢力とは、好んで妥協的政策を用ひ、一定の勢力圏を割讓する代りに、謂ゆる「銀行道德」を遵奉せしめる。

（ロ）フィラデルフィヤ――こゝではモルガンと最も親密なドレキセル商會が支配してゐる。

（ハ）ボストン――ではリー・ヒッギンソンとキッダー・ピーボディとの二大國際銀行家がある。國立銀行ではボストン第一國立とナショナル・ショーマット銀行とが、支配的だが、何れも三頭支配の領域内に屬してゐる。

（ニ）シカゴ――第一國立、イリノイス・トラスト・エンド・セーヴィングス、コンチネンタル・エンド・コンマーシアル等の有力團が支配に屬する。等々…。

かくして、全國的なる獨占金融網が組織されてゐるのだ。

9　金融的支配の便法としての「持株」

最後にかゝる大結合網を構成する現實の手段は主として持株、株式交換、重役交換等である。米國では「證券資本主義」は著しく發達し、その結果大資本家達は少額の資本で厖大な財團を支配する處の幾多の巧妙な方法を案出したのだ。

例へば、株式の種類を幾種かに分けて、その中特殊の株式だけに重役選擧權を限定するが如き、又は白紙委任狀で議決權の行使を像め特定の代理人に一任する方法(謂ゆる Voting trust)の如き、――何れも此の集中的支配を強く促進するものである。

又最近盛んに論議される株式分散の傾向こそは少數大資本團の統制權を強化する效果を持つてゐる。と、言ふのは多數の小株主に投票權が分散してゐる場合には、大株主は、容易に反對派の陣營を攪亂して、その支配力を確立することが出來るであらうから。

かくて、或會社の支配權を把握するには、も早、決して總株數の過半を所有するを要せず、僅に投票權株の一五%乃至二〇%位で充分であると言はれる。然も、それも全株式に對してではなくして、投票權付きの特殊株式に對してゞあるから、全體に對する割合は實に僅少ですむのである。

更に進んで持株の支配はそれからそれへと實に數重的に擴延されてゐることを忘れてはならぬ。所謂ピラミッド型支配によつて、實に莫大な全系統が容易に統制されるのである。例へばロック・アイランド鐵道系では此數重的支配によつて首腦的親會社は百五十個の大會社、その總資本十五億弗を支配してゐるが、此全體系の最後の統制權者は僅に二千五百萬弗の投資をなすに止まつてゐる。

又アトランチック・コースト・ライン系では僅に五百萬弗の持株で七億二千五百萬弗が支配されてゐる。等々……。

尙ほ、株式の相互交換等の仕組みが、此の支配力を一層擴大せしめることは言ふまでもない。

×

さて、以上の要約的な説明で米國金融資本の一般的概念を與へ得たこと、して、私は、これから愈〻モルガン王國の發達史に筆を移さう。

その二　モルガン治下の銀行集中

1　銀行資本の分散

前にも述べたやうに米國では銀行資本は、最近まで歐洲先進國のやうなすばらしい發展を遂げなかつた。

その根本的な原因は・・・「社會の若さ、自由なる土地、利潤ある投資の大なる可能性が、貸付資本の成立を妨げた」點に求められる。・・・「今日に至る迄、アメリカには、『節欲』によつて一錢一錢と積んで小資本を節約する習慣は、存してゐない。併も銀行資本の基礎を形成するのは正に節約の預金なのである。現在の所得から何物かを節約する代りに、賦拂ひ購買の形に於て將來の所得の前以ての支出が行はれてゐる。」(ヴァルガ)

試に全銀行機關における預金額の趨勢をみると・・・・

	全銀行合計 百萬弗	國立銀行	州立銀行	信託會社	貯蓄銀行(ソノ他略)
一八八〇年	二、一三四	八三四	二〇九	九〇	八一九

一九〇〇年	七、二三九	二、四五八	一、二六七	一、〇二八	二、三九〇
一九一〇年	一五、二八三	五、二八七	二、七二八	三、〇七三	四、〇七〇
一九二〇年	三七、三一五	一三、七〇五	一〇、八三六	六、〇六六	六、五三八
一九二七年	五一、一三三	一八、二三九	一二、九三七	一〇、〇九四	九、七三九

現に大戰前までは國内の銀行業では産業資本の需要に應じきれずに、盛んに海外先進國から資本の供給を仰いでゐた程だ。

この全國的な資本不足の結果でもあるが、又同時に、此の不足を一層痛感せしめたのは銀行法規が銀行機關の集中をさまたげ、それを強く孤立的ならしめたことである。

例へば、多くの州では銀行支店の建設を禁じてゐるし、銀行業務の範圍をも強く制限して、相互に他から侵さぬやうに仕組まれてゐた。之れは、恐らく銀行の集中化によつてたゞさへ缺乏してゐる資金を中央都市へ吸收されてしまふことを防壓しようとしたのであらうがそのために各州毎に劣弱な小銀行の群立狀態を生じ、それによつて金融力の圓滑な疏通をさまたげたのだ。

2　群小銀行の行き詰り

小銀行の群立狀態は次表の通りである。

	全銀行數	國立銀行	州立銀行	信託會社	貯蓄銀行
	千行	千行	千行	千行	千行
一九〇〇年	一〇・四				
一九一〇年	二三・一	七・一	一二・二	一・一	一・八
一九二〇年	三〇・一	八・〇	一八・二	一・四	一・七
一九二五年	二八・八	八・一	一七・〇	一・七	一・六
一九二七年	二七・一	七・八	一五・七	一・六	一・五

大戰後には多少集中的傾向はあるが、それでもまだ全體に二萬七千行からの銀行がある。國立銀行だけでも七千八百行からに上つてゐる。

後述するやうに紐育とかボストンとかいふ大中心地や大都市には流石に大銀行が聳立してゐ

るが、それと同時に田園地方には、極小的な地方的小銀行が、今以て著しく、分散してゐる。例へば南部地方では、人口八百人當りに一つの小銀行がある州さへあるといつた風だ。

又、比較的大規模な國立銀行でさへ、その一九二九年の現在で、資本金二十萬弗以下のものが全體の間に四分の三！といふ多數を占めてゐる程だ。

しかも、之は、銀行集中が盛んに行はれ出した後ちの最近の狀態なのである。

これらの小銀行は、やゝもすれば、財政的破綻を暴露する。一寸した地方的不景氣や、一寸した些細な失敗のためにも、すぐに行き詰つてしまふのだ。

現に最近數年卽ち一九二一—二八年の間に約五千の銀行が破綻を暴露したが、その中八割までは人口三千以下の小町村の小銀行であり、又七割までは資本金五萬弗以下の極小銀行である。

破綻しないまでも、一般に小銀行が地方經濟の不振と共に行き惱んでゐることは明白な事實だ。

そこで、かうした地方的小銀行の行き詰りを救濟するために種々の改良が提案されてゐる。

それらの中、外部からの保護を求めるものは姑くおき、銀行業自體の合理化を眼目とするものは結局銀行機關の資本的規模の擴大を前提としないものはないやうだ。

といつても、單純に地方銀行の資本を擴大させるだけでは問題は解決されない。

なぜならば、一地方には擴大された資本に相應するだけの銀行業務がないのだから。

だから、是非とも一銀行の活動區域を擴大し、仕事の範圍と分量とを增加せねばならない。

それには銀行の膨脹、支店建設等の外に合同—結合等が必然に考へられる。

近來、銀行支店問題(branch banking)や連鎖銀行乃至集團銀行問題(Chain banking, Group banking)等が盛んに論議され、又、その方向への現實の發展が起つてきた主因の一つはこゝに求められる。

3　英米大銀行の規模

だが、翻つて大都市の大銀行には早くから相當な集中が行はれてゐた。

モルガンやキューン・ロエブ等の大投資銀行家はかゝる大都市の大銀行と緊密に結合し、これらの預金を利用して大トラストの證券統制を樹立してゐたのである。

周知の如く米國の大銀行は直接には産業投資を行はなかつたが、此の大投資銀行家との内的連鎖を通して間接には厖大な金融資本網の源泉となつてゐたのである。

で、一流の大銀行は戰前でさへ一億乃至二億弗といふ巨額の預金を持つてはゐたが、何といつても英獨等の高度の集中化に比べれば、ここでもはるかに分散的であつた。

例へば英國の五大銀行と米國の一流大銀行と規模を比べると…

(1)英國では大戰直前において株式銀行は全體で僅に四十三行に集中されてしまひ、その支店が五千八百、その預金總額が八億一千萬磅であつたが、その中倫敦の五大銀行だけで六億四千萬磅からの預金を吸收してゐた。即ち、全體の八割近くであり、五大銀行の一行平均一億三千

萬磅(即ち約六億五千萬弗)に上つたのである。

(2)之に反して、米國では、戰前にも全國預金額は百四十億弗の巨額に上つてゐるが、その中比較的大規模な國立銀行だけでも、その數は七千五百行の多きに上り、その預金は約六十億弗(即ち十二億磅)である。

つまり、英國では大銀行の支店となつて統一的に管理されてゐる預金が、米國では支店禁止のために個々の獨立銀行に分割的に管理されてゐるたのだ。

それで、最大の一流銀行をみてもナショナル・シチィ銀行の一九二四年の預金は二億八千萬弗弱、チェース・ナショナル銀行の一九一五年の預金でさへも二億六千萬弗弱、ナショナル・バンク・オブ・コンマースの一六年度の預金でさへ二億六千萬弗弱…といつた具合で、倫敦大銀行に比べては、三分の一位の大きさにしか當つてゐない。

だから、大都市の大銀行でさへ先進國に比べては、はるかに分散的なのであつた。

處が、産業界では、實に世界無比の大トラストが簇出して最も高度な集中化が行はれてゐた

のだから、此の銀行分散は當地でさへ、時代錯誤であつたのだ。
勿論內面的連鎖で相互に結合されてるとはいひ乍ら、多行取引には多くの不便が伴つた。

4　最近合同運動の主因

大戰後になつて、果然大銀行の間に猛烈な合同運動があらはれてきた。

(1)戰後の產業飛躍、產業的大集成等だけでも早從來の分散を許さなくなつた。
產業大集成の一、二の例をあげるならば・・・
(a)鐵鋼業――ユー・エス・スチール・トラストの總資產は、一九〇四年末には十六億弗だつたが、二八年末には實に二十四億弗！强に上つた。此間に同社の製鋼量は八百噸から二千萬！噸にさへ上つた。
のみならず、幾多の大コンツェルンが出現した。ベストヘム・スチールの如きは今や鋼鐵年

產力八百萬噸！に達する程だ。
此の二大トラストだけで中歐聯合の全能力と匹敵する。
(b)石油業――戰前スタンダード・トラストが解散された時その資本額は一億一千萬弗だつたが、一九二三年にはニュージアシイ・スタンダードだけで八億三千萬弗！に上つてゐる。スタンダード石・油コンツェルンの總資本は恐らく四十三億弗！の巨額を超えるだらうといはれる。
(c)銅工業――でさへ、その覇者アナコンダは戰前の一億五千萬弗から、三億弗に、そして最近には一躍して六億弗！の巨資へと擴大された。
(d)電氣工業――ジェネラル・エレクトリックの株式資本だけでも戰前の六千五百萬弗が二億二千萬弗へ上つた。
(e)自動車工業――フォードの年產臺數は八萬臺から二十數萬臺へ、ジェネラル・モータースも亦五萬から二十萬臺へと飛躍した。
純資產は何れも二千萬前後から實に六億乃至七億弗！に上つた。等々・・・・
かゝる革命的大企業化につれて銀行取引の規模も實にすばらしい大量單位に上つた。

例へば、一流大銀行では一口、十萬弗以下の貸付は餘り歡迎しないとか、又はコール・マネーも一口百萬弗以上のものを、數口分も一度に取引することなどが珍らしくなくなつた。處が銀行法規は今でも一取引先きへの貸付金を自己資本の十分の一以内に制限してゐるから、此の大口需要に應じるには資本の擴張が必要となるのだ。

(2)それに、國際金融——とりわけ海外投資が、革命的な發展を遂げて、大口取引が、盛んに行はれるやうになつた。百億弗の戰債を除いても、百數十億弗の海外投資を持つやうになつたのだ。

(3)銀行法が改正されて外國爲替の引受、割引等に大銀行が進出するやうになつた。そして彼等は海外支店を設けて盛んに此領域に活躍し出した。

一九一六年末に僅に二億五千萬弗に過ぎなかつた銀行手形の流通高は二五年末には七億七千萬弗に上り、二八年末には實に十三億弗！にさへ上るに到つた。

此點からも國際金融の中心地としての活躍はすばらしいものなのだ。

(4)のみならず、大銀行は今や直接に產業證券の大口な引受業務にさへ進出してきた。

從來は投資銀行家の獨占してゐた此新領域への進出こそは大銀行にとつてとりわけ巨額の大口資金の準備を必要とした。

此の新發展と密接に關連してゐるのは大工業が、その資金調達を主として證券發行により、長期市場に求める傾向が强くなつたことである。

試に一流の大金融家が年々如何に巨額な證券引受をなしてゐるかを例示するならば、次表の如くなる。

此表によつて、一流の大金融機關が年々數億乃至十數億弗の巨額の證券發行を引き受けてゐることが分る。

と同時に、ナショナル・シティとか第一國立とかチェース・ナショナルとかの大商業銀行及びガランチー・トラストとかバンカース・トラストとかの大信託會社がいはゆる大投資銀行家と併

1927年度證券發行引受高

金融機關	シンヂケート・マスタとしての引受高	シンヂケートへの參加引受高	合計
	百萬弗	百萬弗	百萬弗
1) J.P. Morgan & Co.	503	——	503
2) National City Co.	436	1.155	1.590
3) Kuhn, Loeb & Co.	424	21	445
4) Harris, Forbes	419	938	1.357
5) Dillon, Read	401	168	569
6) Halsey, Stuart	321	469	790
7) Lee, Higginson	296	983	1.278
8) Blair & Co.	270	323	592
9) Dresel & Co.	219	40	259
10) First Nat. BK. of N.Y.	169	660	829
11) Guaranty Co.	162	1.051	1.213
12) Bankers Trust	153	669	822
13) Chase Securities	136	173	308
14) Union Trust Co. of Pittsburg	135	433	568
15) Bonbright	97	295	292

……(以下略)

んで一流の引受業者たる位置を占めてゐることも分る。

かゝる狀勢の激變が、今や大銀行業にも旺盛な合同運動を捲き起したのである。

5 合同運動の狀勢

銀行合同に關する全國的な統計はないが、たゞ聯邦準備制に參加してゐる組合銀行だけに就ていふと、それは次の如き趨勢である。

一九一九年合同行數……八〇行		一九二四年……一二四行	
二〇年	七七	二五年	一二〇
二一年	一〇四	二六年	一六四
二二年	一二五	二七年	二五九
二三年	一二〇	二八年	一八五

米國銀行家協會で最近に調査した處では、

二十六個の大都市(何れも人口三十萬以上)にある二百五十六大銀行だけで、これらの都市の全預金二百七十億弗中、實に二百億弗を占めてゐるし、又全國の總預金六百億弗の三分の一をさへ占めるに到つた。

即ち、銀行數からいへば僅に全體の一パーセントにしか當らぬ小數の大銀行が、預金額では三十三パーセント强を占めてゐるのである。

又多くの大都市では、夫々三個乃至五個の大銀行で、その全預金の七割五分以上を占めてゐるのである。

しかも、此合同運動で注目すべきことは

(イ)大銀行相互の大結成の盛んなばかりでなく

(ロ)實にいはゆる綜合化的合同の盛んなことである

といふのは商業銀行と投資銀行、國立銀行と信託會社、國內銀行と國際銀行と云つた風に、各種の異つた大領域の大銀行が綜合的結成をなし、いはゆる「金融業のデパートメント化」(de-

合同直前の大銀行(1928 年末)

(單位百萬弗)

銀行名	創立年	總資產	資本	準備金	預金	市場相場
National City Bank	1812	1.848	90	76	1.400	1.268
Chase National Bank	1877	1.430	60	77	1.175	480
Guaranty Trust Company	1864	1.052	40	63	842	327
National Bank of Commerce	1859	934	25	48	700	221
Equitable Trust Company	1871	672	30	27	558	142
Bank of the Manhattan Comp	1799	538	16	29	464	130
Bank of America	1812	416	25	37	317	188
Central Union Trust Company	1864	402	12.5	42.5	298	224
Manufacturers Trust Company	1905	389	17.5	34.5	319	192
First National Bank of Chicago	1863	365	15	22	315	ca.162
Hanover Natianal Bank	1865	320	5	26	282	76
Seaboard National Bank	1883	313	11	14	262	80
Chemical National Bank	1865	289	6	20	226	60
Farmers Loan and Trust Comp.	1822	250	10	23	193	86
First Trust and Savings Bank	1903	145	7.5	14	121	
International Acceptance Bank	1921	133	5.6	10.8	38	
Union Trust Company	1857	112	4	8	96	ca. 34
United States Trust Company	1853	99	2	23	71	72
American Express Company	1850	69	18	7	40§	50
Interstate Trust Company	1926	65	5	2.5	51	22

合同直後の大銀行（單位百萬弗）

合同銀行	資本	預金	總資產
1. Nat. City, Farmers Loan	100	1.593	2.098
2. Guaranty, Nat. BK. of Comm.	70	1.542	1.986
3. Chase Nat., Am. Express	78	1.215	1.499
4. Equitable, Seaboard Nat.,	41	820	985
5. Central Union. Hanover Nat.	17.5	580	722
6. BK. of Manhattan, Internat. Accept. BK.	21.6	502	671
7. First Nat. Bk. Chicago, First Trust & Savings Union	26.5	532	622
8. BK. of Arm., Blair & Co.	—	—	500
9. Interstate Trust, Manufact. Trust	22.5	370	454
10. Chemical Nat., U. St. Trust	8	297	388

partmentalization of finances）を出現しつゝあることだ。

今、小銀行の結合は除き、一流銀行間の大合同を鳥瞰するに、……

先づ合同直前の狀勢（一九二八年末）を示すと、前表の如くである。

これらの二十大銀行は二九年の上期中には合同して十行に半減したが、その組み合せと、合同後の規模とは……（上表參照）

之はたゞ最近の大銀行間の大合同だけだがこゝでも、上述の綜合化の明白な傾向を觀取することができるであらう。

最近の大銀行合同にこそ參加しなかつたが、アメリカ・エキスチェンヂ・アーヴィング・トラストとかバンカース・トラストとか紐育第一國立銀行とか、その他の大銀行も多かれ少かれ合同と膨脹とによつて同じやうにその規模を擴大してゐる。

それで、大戰前後における一流銀行の規模の擴大振りを、二、三の代表例で示すならば……

ナショナル・シチイ銀行（百萬弗）

	資本金	預金	總資產
一九一〇年上期末	一〇	二一六	二八二
二〇年〃	四〇	六九九	一、〇四四
二五年〃	五〇	九二二	一、二一五
二九年〃	一、一〇	一、四七一	二、〇六二

チェース・ナショナル銀行（百萬弗）

	資本金	預金	總資産
一九一五年末	五	二五六	—
二〇年〃	一五	三六三	—
二五年〃	二〇	五五四	—
二九年上期末	七八	一、二一五	一、四九九

ナショナル・バンク・オブ・コンマース（百萬弗）

	資本金	預金	總資産
一九一六年	二五	二五九	—
二〇年	二五	三四九	—
二六年	二五	五六三	—
二八年	二五	七〇〇	九三四

（註）ガランチー・トラストへ合併

かうした急速な大擴張の結果、今日では、これらの大銀行は、も早決して、倫敦大銀行に對

してさへ見劣りのするものではなくなつた。

例へば最近の倫敦大銀行と紐育大銀行との規模を比較するに……

倫敦五大銀行の總資産

	百萬磅
ミッドランド銀行	四七五
ロイヅ	四三一
バークレイ	三八一
ウエストミンスター	三三〇
ナショナル・プロビンシアル	三一一

紐育大銀行の總資産

	百萬弗
ナショナル・シチイ銀行	二、〇九八
ガランチー・トラスト	一、九八六
チエース・ナショナル	一、四九九

6　支店及び連鎖銀行運動

此の大合同の發展――銀行の規模の擴大と併んで支店設置も漸次盛んになつてきた。

元來米國では銀行の取締は州毎に一應獨立してをり、その州立銀行支店設置を全然禁止して

ゐる州が少くない。又或州では支店所在の都市又はカウンチィ内だけに支店設置を制限してゐる。だが、例へばカリフォルニアのやうに全然州内に支店設置を自由としてゐるところもある。

ところが、從來國立銀行を合併して、その支店を經營する場合の外は支店設置を禁ぜられてゐたから、此方法による事業擴張は制限されてゐた。

が、時勢の激變は、も早、かゝる時代遲れの制限をその儘存置することができず、一九二七年になつて（マックファーデン・ペッパー法によつて）國立銀行も州立銀行と同樣に本店所在の都市、カウンチィ内において、一定數の支店を設けることだけが許された。

此の改正があつたりして、支店の現在數は次表の少く激增してきた。

一九一五年現在	五六五
二〇年〃	一、〇五二
二八年〃	三、二三〇

この支店運動と併んで連鎖銀行又は集團銀行化の熱心な運動が注目されてゐる。

が、これは要するに持株その他の財的連鎖による集中的統制に外ならず、從て、今に始まつた運動ではない。

前にも屢々説明したやうに上記の大銀行等は早くからモルガンかキュン・ロエブかの大資本網の中に包擁させてゐる。

一九二九年に發表された米國銀行家協會の特別調査委員の報告によると、最近の連鎖形體は次の三種に大別される。

(1)ある中心的な銀行が他の數銀行を共通に支配する例、――之に屬するものは現在七十七系統あり、四百二銀行、その總資産六十一億弗を含むでゐる。

(2)銀行以外の持株會社が若干の銀行を統制する例、――二十八系統、三百十一行、總資産四十九億弗。

(3)個人的支配の例――百六十七系統、一千七十行、總資産十五億弗。

(4)以上全部を通計して二百七十三系統、一千七百八十四行、總資産百二十五億弗。

即ち銀行數からみれば全國の七バーセントだが、資産額では十七バーセントに上つてゐる。

そして、一つの系統の中には五十行乃至百行といふ多數の銀行を支配するのもある。

之は勿論多くの實例を包含してはゐるが、まだ全體を網羅してゐるものではないし、又、連鎖の意味を不當に狹く制限してゐる。

若し、私が前に述べておいたやうに、實際の勢力範圍といふ風に連鎖又は系統の意味を實質的に考へるならば、此の報告の數字は全く據り處にはならない。

例へば、前掲の十大銀行だけでも總資產は百億弗に上つてゐるのだが、それは實際はモルガン、ロックフェラーその他、二、三の大資本團に集中的に支配されてゐるのである。

そして、これらの大銀行系の有力な重役達の個人的支配や、又は大銀行の姉妹機關たる諸投資會社等を通じて、彼等の實際上の支配の連鎖がいかに廣大な範圍に迄廣まつてゐるかは到底此の報告の數字からは想見出來ない。なぜならば、此報告にいふ連鎖の中には、さうした非形式的なものは全然考へられてゐないのだから。

從て、此報告から吾々がうけとるべき知識は、最近において法規の禁壓にも拘らず、銀行間の連鎖運動がいかに普遍的に、熱心に行はれるに到つたかといふ大勢觀だけである。

私は前にモルガン及びロックフェラー等の大資本系統に屬する大銀行、信託會社等が飛躍的な大合同によつてその規模を、すこぶる擴大したことを語つた。

それに、今、言つたやうに持株的連鎖による結合運動も亦普遍的に發展してゐるのであるから、彼れ是れ併せ考へれば大資本系の勢力範圍なるものは益々擴大されてゐるに違ひない。

ぼんやりした結論だが、こゝにはこれ以上數字的の論證をする資料を持たぬのを遺憾とする。

×

以上の說明から、吾々は米國では銀行資本そのものゝ威力が產業資本に比べて、——少くも原始的には寧ろ貧弱であつたことを知ることができる。

それにも拘らず、それはモルガン等の有能な統制者によつて、巧妙に使役されて、早くから大產業征服の用具として重大な役割りをつとめてきた。

そして、その最初の、然も最も決定的な大征服戰こそは、かの厖大な鐵道業の領域で戰はされたのだ。

いはゞ此鐵道業の支配に成功したので、單なる銀行王モルガンが、一躍して、厖大な大金融資本主に轉化し、現に見る如きモルガン王國の萬代不易の金城が、しつかりと礎石を築き上げることができたのである。

だから、私は次に此の鐵道征服の過程をば稍や丹念に物語らうと思ふ。

その三　モルガンの鐵道征服

——大鐵道業の金融資本化過程——

A　金融資本化概説

1　鐵道支配の重要性

第十九世紀の後半期から極く最近に到るまで、米國の經濟界では鐵道事業程大規模な部門はなかつた。否それは、嶄然他の諸群をとび抜けて、全産業界をへいけいする特異な優位を占めてゐたのである。

それで、鐵道界における成功如何は、米國全産業界の支配權把握にとつて、殆ど決定的な影響を及ぼすものだつた。

例へば、前章にも掲げたやうに、本世紀初頃、大金融資本團の全支配額八十億弗の中、五十三億弗までは鐵道投資であり、之に比べて全産業トラストの合計でさへ、僅に二十五億弗、銀行の如きは二億弗にしか達してゐなかつた程だ。

それからずつと下つて一九〇七——九年頃になつてさへ鐵道業の證券發行額は次表の如く他の全部門の合計額の倍以上にさへ上つてゐた。

毎年證券發行額（百萬弗）

	全發行額	鐵道業	ソノ他全産業公益事業合計
一九〇七年	一、三九四	九五七	四三七
一九〇八年	一、四二三	九九九	四二四
一九〇九年	一、六八二	一、〇一五	六六六

これだけでも鐵道業の支配者が結局いかに全部門の最大の支配者であるかは分る。しかも、鐵道業はかく大規模で、そのために巨富の源泉だといふだけではなかつた。

鐵道を支配してゐれば、自然に、その沿線の重要産業を支配することができ、從て容易に活動範圍を多方面に擴げることができたから、その支配の役割りは益々重大となるのだ。

2　初期鐵道業の投機性

それだけでもない。それに、また、次のやうな特殊の事情も此部門への興味をそゝつた。

それは、鐵道業が極度に投機的だといふ點である。

といふのは、鐵道業では大抵數年乃至十數年後の産業開發をめあてにして線路を敷くのだから、うまく豫想が當ればすばらしい値打ちがでてくるが、見込みがはづれるとなると全くひどい損失となるし、又めさきのことにしても、景氣の動き次第で成績はすこぶる激動的なのだから。

此投機的だといふ點が、又資本家には興味をそゝる點なので、彼等が法外な安値で鐵道事業を手に入れることができたのも一つは此投機性を巧に利用したゝめである。

それにかうした投機的な事業には投機屋が集まつてきて、種々の惡辣極まる「操り」——マ

ニピュレーション――をやるから、それは益々投機的になつてしまひ、從て、賣りたいきや釣り上げの人爲的な波瀾が、益々はげしくなつてくるのである。

しかも、時代はといふと、南北戰爭が一段落ついて、旺盛な產業革命が進行し、廣大な資源の開發が着手され出し、又西部の沃野の開拓が始まり、――要するに、どの方面にも未曾有の潑溂たる、大建設事業が行はれ始めた頃である。

資本主義は、いはゞその伸び盛りの少年期から青年期に移る頃であつて、潑溂たる飛躍的發展が行はれる代りに、その無經驗と無思慮とのために幾度びか混亂と苦惱とを體驗せねばならなかつた。

新技術の利用と新資源の開發とは周到な合理的統制の下に計畫的に實行されるのではなくて、投機的熱狂の下に先きを爭つて、めちやくちやに手をつけられた。

その上、景氣の狀勢に關する知識は一般に極く貧弱でもあつたし、惡いことには通貨と信用制度とがすこぶる幼稚な狀態にあつた。

だから、好景氣が始まるとなると、すぐに熱狂的な沸騰へ狩り立てられ、やがて、必然に、

ひどい反動的恐慌に突き落されるといふのが宿命的な道程であつた。

かうした無統制な、無知な、盲動的狀態は投機者流にとつては絕好の活躍期であるのはいふまでもない。

3　鐵道利權と官權買收

それから此の投機性と密接な關連を持つもので見逃すことのできないのは諸君熟知の通り、大げさな官權買收だ。

それは、鐵道の建設が、監督官廳の認可を要するからであるのは勿論だ。

で、新線の敷設のためにも、又は競爭線の侵入の防壓のためにも、監督官吏と結託してゐることが便利なのはいふまでもない。

又議會を動かして、鐵道敷設に對する莫大な補助を贏ち得るといふ大きな問題もある。

米國景氣指數表 (1871—1897年)

年度	銑鐵產額 (百萬噸)	同鋼塊 (百萬噸)	同瀝青炭 (百萬噸)	商品輸出額 (百萬弗)	同輸入額 (百萬弗)	鐵道荷物輸送 (十年移動平均ニ對スル動搖率)
1871	1.4	—	27.5	460	573	105
72	2.1	—	27.2	469	656	108
73	2.0	—	31.5	568	595	115
74	1.9	—	27.8	570	562	107
75	1.7	—	29.9	511	503	97
76	1.6	—	30.5	591	427	96
77	1.8	—	34.8	620	480	87
78	2.0	0.7	36.2	787	432	96
79	2.4	0.9	37.9	765	514	109
80	3.4	1.2	42.8	890	697	112
81	3.6	1.5	54.0	834	670	115
82	4.0	1.7	68.4	768	753	107
83	4.1	1.6	77.3	795	687	100
84	3.7	1.5	83.0	749	629	95
85	3.7	1.7	72.8	688	588	97
86	5.3	2.5	74.6	713	663	97
87	5.9	3.2	88.6	715	709	107
88	6.0	2.8	102.0	692	725	98
89	7.0	3.3	95.7	827	771	101
90	8.6	4.1	111.3	858	823	107
91	7.7	3.8	117.9	971	828	108
92	8.6	4.8	126.9	938	841	111
93	6.7	3.9	128.4	876	776	114
94	6.4	4.3	118.8	825	676	92
65	9.2	5.9	135.1	825	802	91
96	8.3	5.1	167.6	1.006	682	96
97	9.4	6.9	147.6	1.100	743	89

のみならず、司法官權も亦屢々大げさな買收によつて泥仕合の渦中に卷き込まれた。これは特に、會社爭奪の際にひき起されるであらうところの諸種の係爭沙汰を有利に裁定させんがためである。

とりわけ、初期、草創時代には大投機者流は公然と監督官權を驅使することができたのである。

4　景氣の激動と產業の發展

今南北戰爭以後の景氣と產業發展の狀勢とを示すために一表を作成すると、前表のやうになる。

此表で數字の下に棒線をひいた年度は恐慌の爆發した年で、その前年が沸騰の絕頂である。

そこで、少しく景氣の動きを說明すると・・・

（イ）南北戰爭中の大沸騰は戰後にも大した反動なしに一八七一年以後の盛況に入り、それが七三年に絶頂に達した。處が此年ウインの取引所から始まつた歐洲の大恐慌は紐育をも襲つた。そして深刻な不況が七八年まで續いた。

（ロ）一八七九年の豐作から景氣が恢復して、盛況は八二年まで續いたが、此年に景氣は崩れて、不況は八五年まで續いた。

（ハ）八五年に恢復がきて、八七年に盛況の絶頂に達し、その後小波動を經て、遂に九三年の大恐慌がきた。そして激烈な不況の波が九七年まで續いた。

（ニ）九七年から盛況に向ひ、世紀轉換前後の沸騰に入つた。

大體かういふ狀態で盛況期と不況期とを別けると…

好況期	不況期
一八七一——七三年	一八七四——七八年
一八七九——八二年	一八八四——八五年

一八八五——九〇年　一八九三——九七年

かういふ風に瀕繁にすこぶる大きな景氣の波が來去してゐるが、此三十年間の激動を通じて實に飛躍的な產業發展が行はれたのだ。

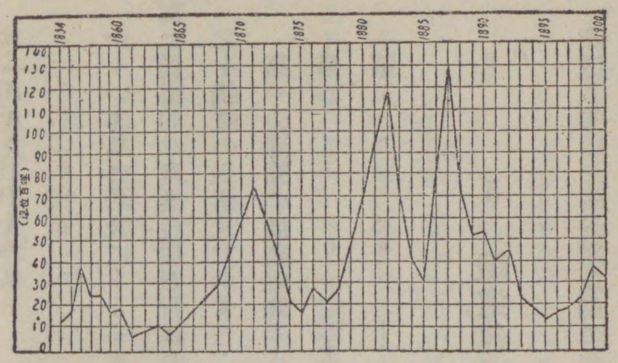
之を銑鐵の生產量で示すと…

第一の沸騰の最高記錄——一八七三年…二百萬噸
第二　〃　〃　——一八八三年…四百十萬噸
第三　〃　〃　——一八九〇年…八百六十萬噸

5　鐵道建設の動き

鐵道事業は勿論景氣運動の中心點でもあれば、その先驅者でもあつた。景氣の動きは先づ鐵道業の盛衰にあらはれた。

毎年鐵道敷設表



そこで、鐵道敷設哩數によつて、その動きをみると、次の圖表の如く、すこぶる大きなカーブで波動してゐるが、

（イ）第一の沸騰は一八七一年に絶頂に達し、反動的凋落は七八年まで續き、

（ロ）第二の大沸騰は八二年に絶頂に達し、

（ハ）第三の更に一層大きな沸騰が八七年に絶頂に達し

それを境として、その後の沸騰の波が、ずつと小さく下つてしまつてゐる。

これでみても、鐵道建設の熱狂時代は七、八十年の滿二十年間であつて、九十年代には、もう一應飽滿期に達したことが分る。

鐵道總延長哩數をみても

一八六〇年現在	三〇・六千哩
一八七〇年〃	五二・九
一八八〇年〃	九三・三
一八九〇年〃	一六七・二
一九〇〇年〃	一九九・〇

であつて、七十年代に約四萬哩、八十年代には七萬五千哩を增加してゐるのに九十年代には三萬哩の增加に落ちてゐる。

6　鐵道業の大結合期

かくの如く、鐵道建設熱からいふと八十年代は最も旺盛な中心期であつたが鐵道企業の大結合——金融資本的統制の點からいふと、八十年代はまだ、初期的段階であつて、九十年代の後

半に入つて漸く成熟期に入り、世紀の轉換前後に於て始めて、その高潮期に達したのである。だから、八十年代において、一應新線の敷設が完了してから、始めて、大結成期に入つたのである。

といつても八十年代に結合運動がなかつたのではない。否、かなり盛んな大企業化と結合化とが既に行はれてゐたのではあるが、それはまだ激烈な相互鬪爭を充分廢棄することができず、大資本的支配の地方的分野もまだ混沌として未成のまゝであつたのだ。

産業調査委員の報告によつてみても、

（イ）一八七〇年までは極く小規模な地方線の分裂時代で、最大線の延長でさへ精々千哩位であつた。

（ロ）八十年代になると一線の延長が數千哩に達する大會社があらはれてきた。例へばペンシルバニア系は四千哩を支配し、ユニオン・パシフィックは六千哩を支配した。

一八八〇年と八二年との三年間には毎年平均八十六箇の鐵道會社が結合し八六年と八八年との三年間には毎年平均二十七箇が結合した。

（ハ）だが、九十年代に入つてから、一層大きな大系統への結成が行はれた。そして一系統の支配は今や一萬哩に達し、更にこれらの大系統の間に漸次緊密な提携が行はれ始めた。

（ニ）最後に世紀終末の盛況期即ち一八九八年頃から一層大きな結合が行はれ、遂に一系統で數萬哩を支配する程になつた。

州際商業委員の報告によると九十年代以後の結合數は

一八九四——九八年間	二百十八箇
一八九九——一九〇三年間	四百七十二箇
一九〇四——一九〇八年間	三百〇一箇

といふ多數に上つてゐる。

7　金融資本化の役割り

かくて、大結合—獨占期は九十年代以後であるが、此時代こそ實に又大金融資本の統制時代なのである。

モルガンに就ていへば、その鐵道業への侵入は既に八十年代の後半から始まつてゐたが、その劃期的大進出は實に一八九三年の恐慌以後である。

キュン・ロエブに就ていへば大鐵道王ハリマン團との結合は實に一八九七年からである。

そして此金融資本の侵入を招致したものはそれ以前の放漫な鐵道經營、水增し的過大投資、並に無暴な相互亂闘の狀態であつたが、今や金融資本の侵入と共に水增し資本の整理、經營の合理化、そして、競爭の廢棄——新結合・獨占的協調の新段階が展開されることになつたのである。

だから單に企業の規模の擴がりの點だけでなく、企業の統制者の性質の相違の點からいつて此九十年代的新展開は甚だ注目されねばならぬのである。

いひかへれば、それ以前は鐵道の支配者は例へば、ドリユとか、グールドとか、フィスクとかいつた風な大投機者流でなければ、ヴァンダビルトとか、ヒルとか、ハリマンとかいつた風な大産業資本家であつて、從て、彼等の政策は投機的「操り」と法外な水增しによる一時的暴利に向けられてゐるか、さもなければ、草創期的産業家特有の野猪的衝突政策であつた。

そのために全部門が不健全な混亂に陷つてゐて、大企業でさへ財政的には甚だ危險な狀態にあつた。

果然、九十年代の恐慌によつて、彼等の破綻が暴露された。そして大金融資本團の新統制へと途を開いたのである。實に、一八九三年の恐慌によつてモルガンとロックフェラーとは一擧にして、全鐵道界の支配權を把握してしまつたといはれる。

そして金融資本獨特の周到な經營合理化と共に、相互提携の平和政策——平和的侵略政策が展開することになつたのである。

8　大鐵道系統の鳥瞰

そこで、二十世紀の初めにおける、此金融資本的支配がいかに大規模なものだかを示すために先づリーフマンの著書から一表を引用すると・・・

主要大資本團支配哩數

(1)	モルガン團	二萬八千哩
(2)	ヴアンダビルト團	二萬四千哩
(3)	ヒル團	二萬五千哩
(4)	ハリマン團	三萬三千哩
(5)	グールド團	一萬六千哩
(6)	ホーレイ團	一萬六千五百哩
(7)	ペンシルヴァニア鐵道會社	一萬三千哩
(8)	ムーア團	一萬〇六百哩
(9)	アチソン・トペカ・サンタ・フェ	一萬〇五百哩
(10)	スタンダード石油	一萬哩

かういふ風に一萬哩以上の大鐵道網を支配するものだけでも十箇に上つてゐる。

だが、實際はこれらの大資本團も決して相互に獨立してゐるのではない。そして大抵は前述の如くモルガン系か、ロックフェラー・キュン・ロエブ系かに結合してゐるのだ。

例へばモルガン系のものにはヴアンダビルト、ヒル、アチソン・トペカ、等があり、キュン・ロエブ系にはハリマン、グールド、スタンダード等がある。その他のものも、多かれ少かれ、此兩金融資本團の支配をまぬがれてはゐない。

9　モルガンとキュン・ロエブ

モルガン系鐵道網

(1902年現在)

鐵道名	哩數	資本(弗)
Northern Securities Co.	——	400 000 900
System der Great Northern Railway	8 988	96 683 454
System der Northern Pacific Railway	9 115	177 925 789
Chicago, Burlington & Quincy Railway	13 645	362 357 300
Southern Railway mit abhängigen Linien	14 368	355 484 309
Central of Georgia	3 655	53 646 000
Louisville & Nashville	9 936	165 784 660
Reading mit Jersey Central und Coal & Iron Co.	3 429	297 067 290
Erie	4 110	362 770 756
Hocking Valley	1 514	70 189 548
Lehigh Valley	2 251	94 012 100
Atchison, Topeka & Santa Fè (mit Harriman)	12 744	445 235 240
St. Louis & San Francisco (mit anderen)	5 644	121 593 125
合計	89 399	3002 949 571

(註)* キュン・ロエブーハリマン系との共同支配——但し1904年の大審院判決によつて解散。

現にモルガンの傳記者ヘンリイ・スミスによると一九〇二年現在の「モルガン系鐵道網」は上掲の如く八萬九千哩！總資本額三十億弗！に上るといはれる。

しかし、此表中には大ヴァンダビルト系の諸鐵道が全然除かれてゐ

キュン・ロエブ系

(1910年現在)

	千哩
Southern Pacific	10.3
Union Pacific	3.8
Illinois Central	6.3
Baltimore & Ohio	4.6
Wabash	2.7
Missouri Pacific	4.2
Denver & Rio Grande	2.8
Texas & Pacific	2,0
Chicago, Milwaukee & St. Paul	9.7
Missouri-Kansas-Texas	3.4
合計	49.8

(註) 尙ホ此外ニ Chicago & North Western ヲモ支配スルトナス說モアル。又大 Pennsilvania 系ニモ金融的關係ヲ持ツテ居ル。

る。それはシカゴ・ノースウェスタンやニューヨーク・セントラルを始めとして通計二萬四千哩に達するから、之をも加算するとモルガン系の全支配は十一萬哩を超える厖大なものになる譯だ。

同じやうにキュン・ロエブ系支配の鐵道網も恐らく上掲の

やうな諸大系統を包含するであらう。

これはたゞ二千哩以上の大鐵道網を摘記したゞけで、決して全支配網を示すものではないが、それでも約五萬哩の大系統になる。

モルガンには及ばぬとしても、はるかに他群を抜いた双璧の一つであるといへる。

10　世界大戰前後の金融資本

かくて、前世紀の終末から本世紀の初頭にかけて鐵道業の金融資本化は一應確立されたのであるが、興味あることには世界大戰前になつて大金融團の支配は急にその把握力を一層強化したのである。

といふのは、前世紀末にはまだ、ヴアンダビルトやハリマンやグールド等の老産業資本家の陣營も無視することは出來ず、彼等はモルガンやキュン・ロエブ等と結合するとはいひながら、まだうつ然別個の一王國を形成してゐるともみられたのだが、大戰前になると、これらの産業

モルガン系大鐵道ノ資産

(1925年末現在)

	百萬弗
New York Central	1.939
N. Y. N. Haven & Hartford	545
Erie	416
Reading	349
Lehigh Valley	232
Delaware, Lackawanna, Western	282
Central of N. Jersey	193
Chesapeake & Ohio-Hocking Valley	382
Southern Railway	644
Atlantic Coast Line-Louisville. Nashville	838
Atchison, Topeka, Santa Fè	761
Great Northern	482
Northern Pacific	508
Chicago, Burlington, Quincy	686
Boston & Maine	273
十五系統合計	8.530

資本家は相次いで凋落してしまつたからだ。

例へばヴアンダビルト家は、既に一八八九年ウィリアム・ヴアンダビルト(第二世)の歿後實權はモルガン家に移つて行き

ハリマン家では一九一一年に

キュン・ロエブ系大鐵道ノ資產

(1925年末現在)

	百萬弗
Baltimore & Ohio	806
Illinois Central	724
Union Pacific	657
Southern Pacific	1.008
Chicago, North Western	685
Missouri Pacific	517
Wabash	180
Chicago, Milwaukee, St. Paul	687
Missouri-Kansas-Texas	162
Denver, Rio Grande	109
十系統合計	5.529

老ハリマンの歿後、やはり適當な後繼者なくして實權はキュン・ロエブ家に歸し、

グールド家も老ジェイ・グールドの歿後、若年のジョージ・グールドか一時海運業に活躍してゐたが、失敗してキュン・ロエブに屈服せねばならなくなつた。

かうして、かつて十九世紀末に活躍した大鐵道王はいづれも、その後繼に惠まれず、大戰前になると相次で凋落し行き、それにつれて、彼等と提携してゐた大金融團の支配權は、

著しく、その把握力を強大ならしめることができたのである。

前表はボーゲン教授の近著「鐵道證券の解剖」から引用するもの。州際商業委員會の調査に基いてボーゲンが算出した大會社の最近（一九二五年末）の資產見積りである。

一、二の例外を除けば大體二億弗級以上の最大會社のみであるが、それだけでも

モルガン系十五社……八十五億弗

キュン・ロエブ系十社……五十五億弗

の巨額に上つてゐる。

11　持株組織の例證

これで大鐵道系のすばらしい集中的支配狀態を概說したことになるのだが、最後に、かゝる集中的支配が、いかに大げさな持株的統制で組み立てられてゐるかを一言しておかう。

といふのは、前々も述べた通り、此持株支配こそ現代金融資本的統制の獨特な仕組みなのだ

から。

例として、やはりモルガン系の二、三の大會社を擧げてみよう。

リノフマンの著書によると大戰直前で、ニューヨーク・セントラル（ヴァンダビルト家の最大鐵道）は次のやうな支配網を持つてゐた。

(1) 直接に二十四個の大會社を持株的に支配する。

(2) 此の所屬中の一つ、レーキ・ショーア・エンド・ミシガンが更に二十八社を持株で支配する（即ち孫會社）

(3) 此孫會社中の一つ、ピッツバーグ・エンド・レーキ・イリーが更に八箇を支配する。

(4) 此曾孫中の一つ々々が、更に夫々、三箇乃至四箇を支配する。

かくして、娘、孫、曾孫、等々々……數重的に百箇の大小會社が支配されてゐる。

又、モルガン直系の大會社サウザン・レイルウエイでは

(1) 直接に六十二社を支配。この中には數箇の持株專門の會社がある。

(2) これらの持株會社は又更に十二個の孫會社を支配する。等々……

同樣に他のモルガン直系會社、アトランチック・コースト・ラインはそれ自體大持株會社で、その數重的持株によつて約八十社を支配する。イリイ鐵道系も亦約七十五社を支配する。……かういふ風に、モルガン系統の全支配網を數へ上げて行けば實に千餘の大小雜多の鐵道會社が列記されるだらう。

又、鐵道業の持株的連鎖――株式交錯狀態を綜括的に示すものとして次の數字を引用しておかう。

即ち一九〇八年に發表された州際商業委員の調査報告「鐵道業に於ける會社相互の連鎖關係」によると……

當時全鐵道業の證券資本額は

百八十二億弗 ｛社債……九十三億弗 / 株式……八十九億弗｝

此中、鐵道の持株に屬するものは

五十五億弗（社債……十四億弗／株式……四十一億弗）

即ち全證券の三割以上、そして株式では實に四割七分までが、他の鐵道會社の持株となつてゐるのだ。

又ピカードの研究によると

(1) 一八九〇年には約一千八百の鐵道會社があつたが、その中、約八百社は全く持株專門の會社であつた。

(2) 一九〇九年には約二千二百會社中約九百社がやはり持株會社だつた。……

だが、持株的連鎖は鐵道會社相互だけに止まらない。有力な鐵道會社は、その沿線の諸產業會社をも統制すること前にも一言した通りである。

前掲の州際商業委員の報告では次のやうな數字が示されてゐる。

鐵道會社は通計して約四億六千萬弗（此中、約三億二千萬弗が株式）の產業證券に投資してゐる。

その主な內譯は、

(1) 鑛山會社……一億六千萬弗

(2) 海運、運河、橋梁、トンネル、急行運送……約九千萬弗

(3) 土地、土木……五千萬弗

(4) 電氣鐵道……四千萬弗

(5) 製造會社……四千萬弗

(6) その他……四千萬弗……

それと同時に、逆に產業會社が直接に鐵道證券を支配するものも多い。

その最大の一例はユー・エス・鋼鐵會社で、總計三十一社、一千百哩の鐵道を支配してゐる。

だが、これらは鐵道と產業會社との直接の、且つ表面的な連鎖網の一斑に過ぎない。

實際には前章に圖表で示したやうに大金融機關を中心にして一方に大鐵道と他方に大産業會社とが、いはゞ共通な大資本的系統網の中に織り込まれてゐるのである。

いはゆる金融・鐵道・産業の三位一體的支配が、かくして形成されるのである。

B　ヴァンダビルト・グールド時代

12　一八六〇年のモルガン家

さて以上で、鐵道業における金融資本的支配の狀勢を概說したから、これから、專らモルガン家を中心とした金融資本化の道行きを說明することにしよう。

前にも述べた通りモルガン家が産業指導者として中央舞臺へ登場したのは前世紀の九十年代以後のことである。では、それ以前のモルガン家はどんな位置を占めてゐたのか？

これを考へるために少しモルガン家の經歷を語らう。

此九十年代の鐵道支配に活躍したのは先代モルガン（John Pierpont Morgan）であるが、

彼は一八三七年の出生だ。その父はジュニアス・スペンサー（Junius Spencer Morgan）といつて、既に、相當有力を個人銀行家であつた。

殊に父は當時の有力な英國銀行家――そして國際投資家たるジョーヂ・ピーボディ（George Peabody）に知られて、遂にその組合員の一員となり、ピーボディ家の本店のある倫敦に定住して、國際投資に活躍してゐた。

ジョン・ピアモント自身も獨逸ゲッチンゲン大學の修業を卒へてから、一時倫敦の店で働いてゐたが、一八五七年にボストンへ送られて、こゝでピーボディ家のエヂェントたるダンカン・シャーマン商會（Firma Duncan, Sherman & Co.）に入つて働らいた。

が、すぐに、ダンカン商會から離れて、ダブネイと協働してダブネイ・モルガン商會（Firma, Dabney, Morgan & Co.）をおこし、直接にピーボディ家と接觸して、いはゆる個人銀行業務を營んだ。

勿論當時の彼の位置は微々たる一介の小銀行家であつて、その活動にも特に注目される程のものはなかつた。

そして彼の主たる關心は國際金融にあつた。當時の產業界では棉花貿易は實に中心的役割りを演じてゐたから、棉花爲替の割引は英、米兩國を結び付ける重要な仲介業務であつた。

通貨の混亂などを利用した爲替投機なども一の重要な業務だつたらしい。

又當時の米國は英國その他の先進國から、なにかにつけて巨額の投資を仰がねばならなかつたが、モルガン家は英國の大金融家と合併してゐたから、此の國際投資の仲介者としてはかなり有力な活動をすることができた。實際、世界最大の英國投資市場と緊密な關係を持つてゐるといふ一事こそは、ながく、モルガン家の國際金融上の活動には重要な背景をなしたのである。

例へば、當時の政府が濫發した巨額の公債や、莫大な鐵道證券の英國市場への賣り込みなどはモルガン家の最も得意とする處であつた。

かうした仲介業務で彼は國內の政府及び事業家と海外の投資家とから、深い信頼をかち得てきたのだ。

だが、モルガンの注意はまだ鐵道投資にはひきつけられてはゐなかつた。又鐵道事業もまだ、

極く、小さな初期の狀態にあつた。そして鐵道熱の狂嵐はまだこなかつた。

東部地方ではペンシルバニアやボルチモア・オハイオ線などが漸く短距離の建設を始めてゐた。

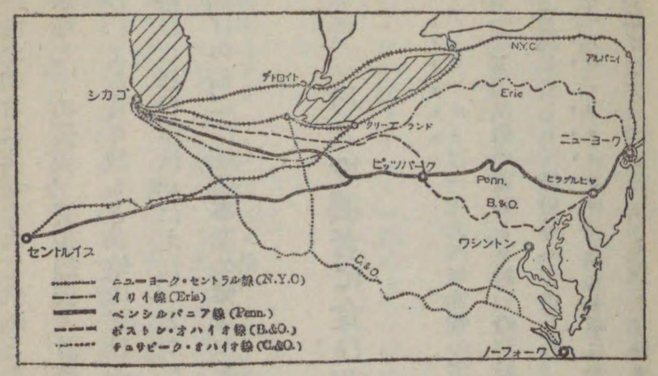
13　南北戰爭後の大鐵道熱

處が、南北戰爭がすむと、前述の通り大鐵道熱が捲き起つた。そして、一八六九年から七三年にかけての沸騰期の中にニューヨーク・セントラル、ペンシルバニア、イリイ、ボルチモア・オハイオ等のいはゆる大幹線系統ができた。

この鐵道熱は實にすばらしかつたが、又、それだけ、實に驚くべき惡辣なあやつりと奸策とが行はれた。

そして、ダニエル・ドルュー (Daniel Drew) や、ジェイ・グールド (Jay Gould) やジム・フイスク (Jim Fisk) といつたやうな投機界の梟雄が跳りようしてゐた。有名な大鐵道王コーネ

大幹線競爭圖表（ニューヨーク・シカゴ間直行ノ分ノミ）



リュース・ヴアンダビルト (Cornelius Vanderbilt) も亦彼等と死活の血鬪を戰つてゐた。

ウォール街は鐵道投機を中心として激しき狂嵐をまき起してた。

又當時の混濁しきつた政治と司法權とが、此の惡辣な投機と「操り」とに結びつき、鐵道建設の認可權を持つ州知事や係爭の裁定權を持つ司法官等がウォール街の娘達の御先き棒をつとめて、盛んに横車を押し廻してゐた。

いはゞ當時の鐵道事業は全く惡辣極まる投機屋の掌中に支配されてゐ、眞面目な投資家はいたましくも翻弄されてゐたのだ。

投機者流は又常に相互に反嚙し合つた。そして、

今日の一味は明日は裏切られて仇敵となつた。重役會の乗取り運動、悪計の虚報流布、突如たる大「水増し」の發表、擴張線獨占計畫、法外な保護と特權の强要、官權抱き込みの猛運動、釣り上げによる賣り放ちと底値の買ひ占め等々……はほんの常套茶飯事であるが、裏に廻はれば大仕掛けな暴行沙汰がたえたことがなかつたといはれる。背任に次ぐに背任。かうして、投機的な儲けの前には鐵道事業の健全な發展などは一顧もせられなかつたのだ。

14　投機者に食ひ荒されたイリイ會社

ヴアンダビルトは一七九四年赤貧の家に生れ、沿海航行業によつて發展の土臺を築き上げ、四十歳の頃には五十萬弗の蓄財と百艘の沿海船とを所有する程になつた。南北戰爭の際之を政府に賣りつけて、百萬長者として鐵道界へ進出した。

ダニエル・ドリユーは一七九七年にやはり貧しき農牧者の家に生れ、牧畜に成功し、ハドソン河の渡し船でヴアンダビルトと角逐し、一九五四年には既にイリイ鐵道を支配してゐた。

彼はイリイの財務主任（トレジユアラー）の要職を把握し、イリイ株の賣買を操つて不當の巨利を得たが、背任で財務主任を免ぜられた。が、重役の一員には止つてゐた。

六四年頃からヴアンダビルトのイリイ乗取りが始まり、ドリユーとの激鬪が展開した。が、のちに兩者の妥協ができて、ヴアンダビルトはイタリーから手を退いた。

ゲールドはドリユーの腹心として登場した。そしてフイスクは又ゲールドの分身として現はれた。此兩者はやがて共通の親分たるドリユーを裏切り、之を沒落せしめて、活動の中心的位置に乗り出した。

彼等はドリユーに倣つて盛にイリイ會社の水増しを濫發して、投機的活動に濫用した。イリイ會社は既に六七—八年間に二千五百萬弗から三千四百萬弗に膨脹してゐたが、ゲールド等の支配に歸するや數ヶ月ならずして實に五千八百萬弗！　へと水増しされた。

ゲールド一味はその横暴の邪魔を除くために、ヴアンダビルトに好餌を與へて妥協した。ヴ派はゲールド一味の官權を利用して、此間にしきりに小會社の合併と擴張とを行つた。

ゲールドは、尙ほ理由の不明な水増しを濫發し、六九年の九月にはイリーの普通株は七千八百萬弗

にさへ上つた。

次で有名なグールドの金買占め運動が起つた。それは株價の低落と穀物價格の低落とを阻止するために大仕掛けな金の買占めを斷行し、それによつて漸く行詰らんとしたイリーの投機を持ち直さんとしたのであつた。グールドはしきりにフイスクをして金を買占めさせ、又大統領をも動かして政府の賣り止めを行はしめた。が、それは中途で失敗に歸したが、それを早くも知つてグールドは急速に手持ちの金を處分してしまつた。フイスクは裏切られて莫大な損失を負はされた。

此事件によつてウオール街に對する輿論の憤怒が、ひき起され、又英國の投資家の不信と激怒が高潮に達した。そして、遂にグールド一味はイリー會社から追はれねばならなかつた。(一八七二年)

が、此時既にグールドは、イリーに大穴をあけてゐたから、後年長くイリーは、その穴埋めに苦しまねばならなかつた。

グールドは約二千萬弗の私財を擁して虎視耽々として新投機の好餌をねらひ始めた。

15　ユニオン・パシフィックの背任事件

此頃又ユニオン・パシフイックにもイリーに劣らぬ背任行爲が暴露された。

それは同社の大建設工事を重役が自ら經營する建築會社に不當な高値で獨占させ、背任的に私腹をこやしたことであつた。即ち同社の第一期建設工事百哩は一八六五年に副社長デュラントの一味に請負はせ、後ちに腹心の重役等と共に建築會社を起して、この工事を引き繼いだ。(Crédit Mobilier of America) そして少くも百五十萬弗の不當利益を着服した。

次で第二期六百七十哩の工事も亦彼等の一味に歸した。かくて、六九年にユニオン線の工事が一先づ完了する迄の五ヶ年間に此建築會社は、資本金三百八十萬弗弱に對して實に二千三百萬弗の法外な利益を奪取することができたのだ。

かゝる背任が最後迄暴露しなかつたのは有力な國會議員や官權者流が巨大な收賄で口止めされてゐたからである。

しかし、一八七二年に一味の内紛から内情が暴露され、異常な輿論の興奮を捲き起したのだつた。

かうした泥仕合ひの結果はどうなつたか?——といふと

(1)　鐵道線路は急速に擴張されて行つたが、無計畫による——否、放意の複重的競爭線など

が少くなかつた。

(2) 鐵道證券は實質よりも、はるかに、著しく水增しされるものが多かつた。

(3) 以上の結果、必然に鐵道會社間の法外な激鬪が生じ、鐵道收益は減少した。

(4) 好景氣には鐵道投機が景氣を極度に沸騰させ、反動期には、實にいたましき破綻が暴露された。

16 モルガンとアルバニイ事件

鐵道投資も亦主として英國の資本から成つてゐた。從てモルガンも亦、鐵道證券の仲介業者として働らいてはゐたが、前にもいつた通り彼の關心は、まだ、こゝに深入りすることはなかつた。

いはゞ、當時の、ありきたりの證券仲介業者に止まつてゐて、いはゆる、ファイナンシアーとしての引受業務に沒頭するやうなことはなかつた。

平靜な、平凡な空氣の中で、たゞ勤勉に、熱心に彼の二十代を過ごしてゐたのだ。

たゞ、一つ若きモルガンの血ををどらせた事件が起つて、期せざるに彼の鐵道管理への第一歩を踏み出させた。

それは一八六九年に彼がアルバニイ・サスケハナ鐵道の重役達から泣きつかれて、グールド一味の乘取運動の矢おもてに立ち上り、美事に此の「鐵道ぶつこはし屋」の鼻をあけたことであつた。

けだし、イリイによつてゐたグールド一味は、アルバニイを乘取つて、ヴァンダビルトの本據セントラル線からニューイングランドの石炭運搬を奪取しようと目ろんでゐた。

アルバニイの重役達は此乘取りの前には獨力で反抗する勇氣も實力もなかつたから、モルガンの出馬を哀願したのだ。

そこで、彼は奮起して、あらゆる曲歪と威嚇と誘拐と暴行とに直面して、苦鬪したあげく、遂に强敵を倒して、アルバニイの支配權を確保することができた。

そして彼の支配の下にアルバニィを再び繁榮に立ち歸らせたのである。

モルガンの鐵道支配への劃期的な大進出は、まだ、その後ち十數年もたつてからのことであるが、此の事件は既に彼の不退轉の勇氣と偉大な鬪爭力と進歩的な經營政策とを立證したものであつた。

此の事件の後ちまもなく、一八七一年にモルガンは、フィラデルフィヤの大銀行家ドレキセル家から懇望されて、そのニューヨーク支店に入つた。そして、ダブネイ・モルガン商會を解散して、ドレキセル・モルガン商會(Firma Dlexel, Morgan & Co.)を開いた。

勿論此のドレキセルとの結合によつてモルガンの背景は、すばらしく強大になり、彼の聲威も漸く注目されるやうになつた。

かくして、モルガンの異常に急速な第二段階的進出が始まつたのである。

17 最初のシンヂケート運動——クーク商會とモルガン

モルガンがドレキセルと結合してから、間もなく彼は、當時の最大の銀行家クーク商會(Joy Cooke & Co.)と公債引き受けの激烈な鬪爭を行つた。

クーク商會はフィラデルフィアに本據を持つ大金融家で、既に一八七一年に政府の公債を引き受けるために米國で初めての引受シンヂケート團を組織して、成功をかち得た程の有力家であつた。

此第一回シンヂケートには、モルガンは關係しなかつたが、二年後、政府が再び大公債を募集する際にはモルガンも亦獨自のシンヂケートを組織してクーク・シンヂケートと引き受けを爭つたのである。

その結果はクーク團とモルガン團とに半分宛割當てられたが、これによつても、既にモルガン團の實力が、當時一流の位置にまで上つてゐたことは推測されるだらう。

此時クーク團は大ロスチャイルド一家と結合してゐたが、モルガン團は、モルトン商會、ブリス商會及びベヤリング家等の國際大金融業者で組織されてゐた。

實に此の引受シンヂケート組織――即ち、大金融團の聯合組織こそ、後年、彼の世界的大活躍の最大の武器となつたものであることを忘れてはならぬ。

18　クーク商會の沒落

モルガンの第一回シンヂケート組織の年、一八七三年こそは又かの世界的大恐慌の襲來した年であり、ノーザン・パシフィックへの投資に深入りしたクーク商會が、その破綻を暴露せねばならなかつた年である。

此ノーザン・パシフィックは一八六四年に建設を認可された大横斷線で、延長一千七百五十哩、その建設費一億弗の厖大な計畫であつたが、最初の發起人の手では證券が消化できなかつ

たので、クーク商會にその救援を哀願し、六九年にクークが之を引受けたのである。

クークは初め倫敦のロスチャイルド家の參加を求めたが、それは失敗したので、轉じて、獨逸の國際金融家モーリツ・バッヂやその紐育支店なるバッヂ・シッフ商會等と提携して歐洲への賣込み手筈を定めた。

處が、まもなく、普佛戰爭が起つたのでバッヂ家は組合から脫出し、歐洲への賣込みは大失敗に歸した。米國の證券市場でもその處分は困難だつた。それに、シカゴやボストンの大火、政治的不安、グールド一味のイリー掠奪、ユニオン・パシフィックの背任事件等の惡材料が重疊して證券の處分は行き詰つた。一方、軌條その他の建設費は七二年の沸騰相場で狂騰したので、クークは遂に金融に詰つて七三年の九月に破綻を暴露せねばならなかつたのだ。

かうしてモルガンの好敵手は倒れた。その殘骸を踏み越えて、クーク商會の一味は紐育第一國立銀行（First National Bank of New York）にたてこもつて、證券業務を繼承した。

が、その中心的指導權を握つてゐたのが、かの著明な「金作りの機械」(money-making machine) ジョーヂ・ベーカー(George F. Baker)であつた。

そして、此ベーカーこそモルガンの畢世の盟友。そして紐育第一國立銀行こそ、モルガンの大金庫となつたのである。

C 巨人鬪爭時代

19 國際金融家の擡頭

南北戰爭後の數年間米國の金融業者で鐵道投資に深入りした者は決してクーク商會だけではなかつた。例へばフィスク・エンド・ハッチはチェサピークを、コリス・ハンチングトンはセントラル・パシフィックを、ケニオン・コックスはカナダ・サヴンを、夫々援助してゐたが、何れも、此の一八七三年の恐慌で大打擊をうけ、續々破綻を暴露した。

そして、これらの破產者の持株は新興の國際的大投資銀行家の手中に歸した。彼等は背後に英、獨、オランダ等の歐洲の大投資市場を背負つてゐるので、その財政力も强大であり、且つその證券の吸收能力も大きかつた。

かくて、米國の投資銀行史上においても南北戰爭後の此の大恐慌期は一つの重要な大轉換期

となつたのであるが、その轉換の特徴は國際投資銀行家の擡頭と決定的支配への出發に外ならない。

英國の大金融業と緊密に結合してゐるモルガンが此の新興國際投資家の最も有力な指導的位置を占めるに到つたことは前にも一言した。

又、ロスチャイルド家のエヂェントとしてベルモント商會(August Belmont & Co.)が指導者的活躍をなしてゐたことも前に一言した。

此ベルモント商會は一八三七年にウインナから渡米してきたシェーンベルヒ(August Schönberg)が創立したものである。

モルガン商會は一八七八年に此ベルモント商會と共同し、ロスチャイルド家の援助の下に政府の公債を引き受けて、之を英國市場へ賣り込んだことも前述したが、此の成功によつて國際金融家の支配的優位は全く確立されるに到つたのだ。

モルガンの好敵手たるキュン・ロエブ商會(Kuhn Loeb & Co.)は猶太系の一獨逸人によつて一八六七年に創立されたのだが、その大發展の柱石となつたヤコブ・シフ(Jacob Schiff)が、

これに參加したのは一八七五年以來のことである。彼も亦獨逸人である。

かくて此商會も亦國際投資家としてその頃から勃興してきたのであるが、その中心人物の出生地の關係上、その背景となつたのは獨逸及び大陸の金融界であり、此點でもモルガンの英國系と對立してゐる譯だ。

此商會がモルガンと匹敵して覇權を爭ふやうになつたのは、なんといつても後述するやうにハリマンの事業を援けて、その大鐵道系統を建設するやうになつてからである。

此ハリマンとキュン・ロエブ商會との連鎖の仲介をなしたのがオット・カーンである。

此カーンも獨逸人で、キュン・ロエブ商會の創立者の一人たるウルフの娘と結婚して、キュン・ロエブ商會の大黒柱の一人となつてゐたのだが、ハリマンとは親交の友人であつたから、その鐵道王國の建設には重要な財政的援助を與へたのである。

處が、それが美事に大成功して、キュン・ロエブ商會の投資銀行家としての位置はすばらしく向上したのだ。

キュン・ロエブ商會はハリマンを通じて他の二つの有力な大資本國と結合することができた。それは周知の如くナショナル・シチイ銀行のスチルマンと大ロックフェラー國とである。

スチルマン家とロックフェラー家とは婚姻關係で極く親密に結合されて居り、ナショナル・シチイはロックフェラー家の銀行だといはれる程の間柄だが、そのスチルマンも亦ハリマンの鐵道王國を援助したので、自然キュン・ロエブとも親密な關係に立つたのだ。

それにロックフェラー家の事業は多くの點でモルガンと敵對的立場におかれてゐるから、自然、彼も亦キュン・ロエブと接近するやうになつたのだ。

かうして、キュン・ロエブ——ハリマン——スチルマン——ロックフェラーの大聯合團がモルガンに對立的に組織されたのである。

だが、それは、やゝ後ちの話。——こゝでは、一八七三年の大恐慌を境として舊型の投資銀行家が沒落し、大國際金融團が、その優位を確立するに到つたことを重ねて注意しておかう。

國際金融家の支配——それは米國證券の海外賣込みの大擴張からも觀取することができる。即ち、一八七〇年代になつてから米國の證券は非常な勢ひで英、獨その他の海外投資家へ賣り込まれたのだが、それは全く、此の國際的金融家の活躍に負ふものである。

例へば倫敦市場における米國證券の取引高は七十年代に入ると、次の如く激增してゐる。

	政府公債	州及市價	鐵道
一八六〇——六五年	百萬弗 〇	百萬弗 二	百萬弗 二七
六六——七〇年	〇	一七	五二
七一——七五年	八〇〇	四〇	二七五

國際大金融團の擡頭は、決して、舊時のポンド・ハウス型の國內的投資金融家を全然壞滅させてしまつた譯ではない。とりわけ西部地方の開拓資金と東部投資家とを連結する處の一團の國內投資金融家も現はれてきた。例へば、かのハリス・フォーブス商會(Harris, Forbes & Co.)の如き大投資金融團もかうして此時にスタートをきつたのだ。

も一つ。一八六二年の國立銀行條令に基いて建設された國立銀行も漸次有力な金融機關として發展してきた。始めの中、これは公債の買入れ以外には商業金融の範圍に活動が制限されてゐた。

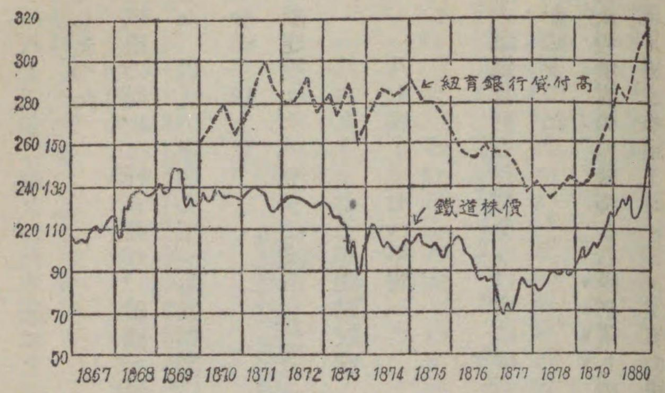
今では、投資銀行家の領域へも大進出をなしてゐる。――が、それは後ちの話。

20　恐慌期の鐵道業

かくて、米國の證券投資界におけるモルガン、ベルモント、キュン・ロエブその他の國際投資銀行家の位置は向上してはきたが、他方において、投機仲買人の鐵道支配的活動は相變らず盛行し續けた。

かのダニエル・ドルューに始まり、ジェイ・グールド及びジム・フィスク等によつて繼承された大投機者の惡辣極まる鐵道荒しの政策は益々大規模に敢行されるやうになつた。

モルガンやキュン・ロエブ等の國際金融家とこれらの大投機者との間には、既に多少の小ぜ



り、合ひは鬪はされたけれども、實權は依然として投機者流の手中にあり、モルガン等はまだ鐵道管理の把握にまでは進出するに到らなかつた。

それよりも大投機者の矢面てに立つて、彼等と鐵道支配の激鬪をたゝかつてゐたのはヴァンダビルト等の大產業資本家であつた。

ヴァンダビルトも亦投機市場の掛け引きとは無關係といふのではなかつたが、彼の主たる關心は、投機よりも着實な鐵道建設事業にあつた。

そして、此の着實な建設的計畫を遂行せんがために、屢々グールド一派の投機者的支配と衝突し、その惡辣な掛け引きに苦しめられてゐた。

かくて、まだ當分は投機者支配の時代がつゞいた。

一八七三年に始まつた不況はその後數年間つゞき、七七年には、いたましい沈衰の底に陷つてしまつた。

鐵道の財政は行き詰り、破滅と賣却と再組織とは相次いだ。その株價は圖表の如き崩落をなした。恐慌の爆發してから五年間に破綻した鐵道は十二億弗、二萬哩を超えた。實に全鐵道の五分の一以上だ。

新建設は次のやうに減小した。

一八六九——七三年間建設哩……二萬八千哩
一八七四——七八年間　〃　……一萬一千哩

大鐵道會社も打擊をうけずにはゐなかつた。貨物は激減して、彼等の間に猛烈な顧客の爭奪戰が始まつた。

此の爭奪戰に苦惱した大ヴアンダビルトは七四年にサラトガに大鐵道業者を召集して、最初の運賃協定會議を開いた。翌七五年にはいはゆる幹線保護協定(Trunk Line Protectorate)が出

來たが、それは、すぐ破棄されてしまつた。

が、いくばくもなく再建されて、漸次、ニューヨーク・セントラル、ペンシルバニア、イリイ、及びボルチモア、オハイオ等の間に獨占的協調の土臺を築き上げかけた。だが、此の獨占運動はまだ、萠芽期であつて、景氣が一轉し、好況へ向うと再び前の混戰狀態へ立ち歸つてしまつた。否、それどころか、前より、はるかに大規模な、はるかに辛辣な泥仕合が始まつたのだ。

21　新投機戰略——巨人鬪爭時代

一八七九年から八三年へかけて未曾有の大擴張が行はれた。之を十年前の記錄年たる六九—七三年間の二萬八千哩に比べて實に四萬哩であり、直前の七四——七八年間に比べると實に四倍近くの大量に達した程だ。

かゝる盛況の裏には勿論投機的跳梁があつた。

此期の投機取引の沸騰は次の證券取引高によつても窺ふことができる。

ニューヨーク證券取引所出來高表

一八七五——七九年平均	……五一・二百萬株
一八八〇——八四年〃	……一〇四・四〃
一八八五——八九年〃	……八三・一〃

鐵道證券は勿論人氣の中心であつたが、大投機者の戰術も、も早、十年前のそれとは異り、はるかに大げさな且つ執拗な、——いはゞ高度の新戰略が案出されたのである。

今、私は熱狂的な線路擴張が起つたと語つたが、それは敷設哩數こそ大きいが、も早、未開地域の新開拓をめざすものではなく、寧ろ既設線と併行的な、無暴な競爭線たるものが少くなかつた。

しかも、それは、決して偶然ではない。無暴な競爭線で威嚇して、之を高値に賣りつけるか、又は相手を打ちのめして、之を捨値で乘取らうとするのが投機的鐵道荒し屋の新魂膽であつたから。

處が、既設大會社の方でも、始めの中はかうした投機的競爭線を一々高値で買ひ上げてゐたが、次第に應酬の煩に堪へられなくなつて、それを突き放す政策をとらねばならぬやうになつたから、こゝに猛烈な鬪爭が始まつた。

それも、好景氣の間はよかつたが、八四年頃から深刻な不景氣が襲來するにつれて、鬪爭は必然に死活戰にまで展開した。そして、それまでは極めて健全だつた大會社さへも、此激鬪の瘡痍のために收入は激減し、負債は山積し、瀕死の苦境に沈湎するものが少くなく、破綻と再組織とは相次ぐといふ、いたましい狀態に陷つた。

一例として、かのゲールドの活躍を見よう。

彼は一八七二年にイリイを追はれてから、恐慌にあへぐユニオン・パシイフイツクに着眼して、之

を安値に把握した後ち、七九年の沸騰で具合よく賣り拔けてしまつた。

その後ち、すぐにセント・ルイスとキヤンサス・シチイとを連絡するキヤンサス・パシフイツクといふ短線のぼろ會社を手に入れ、之を土臺としてデンバー・カリフォルニア間の大競爭線を擴張するといふ計畫を樹てゝユニオン・パシフイツクを威嚇した。

實は此のキヤンサス・パシフイツクは七四年にレシイバーの手に渡つた程のぼろ會社で、七九年にもまだ缺損狀態だつたのだ。

だが、此の威嚇は效を奏して、ユニオン・パシフイツクは對等條件でキヤンサスとデンバーとを買ひ取らねばならなかつた。そして、そのために同社は約一千五百萬弗の投資をして、之をゲールドに與へた。

前からモルガン團と親交のあつたヴアンダビルト系も亦、此泥仕合の渦中にまき込まれてゐた。

卽ち、その大ニューヨーク・セントラルはニツケル・プレートとウエスト・ショーアの兩競爭線によつて苦められてゐるし、一方ではサウス・ベンシルバニア線をつくつて大ペンシルバ

ニアに挑戰してゐたのだ。

彼は競爭戰の苦痛にたへかねて、やむなくニツケル・プレート線を法外な高値で買收せねばならなかつたが、ウエスト・ショーアに對しては飽くまで死活線を繼續せしめる決意でゐた。それと同時にペンシルヴアニアもヴアンダビルトの挑戰を囘避しようとしなかつたから、いはゆる巨人鬪爭は物凄い赤熱狀態にまで進んできた。

遂に八五年にはウエスト・ショーアはレシイバーの手に渡らねばならなかつた。が、それでも、莫大な缺損をしつゞけながら最後までの血鬪を止めなかつた。實際內幕は破產を超えた苦境だつた。

かういふ狀態は、多かれ少かれ、いたる處に鬪はされてゐた。殊にラツカワナとイリイとは略ぼ同じやうな混戰に陷つてゐた。

從て、鐵道會社の營業成績は、どれもこれも、一樣にいたましい不成績で、內外投資家の信賴からは全く見棄てられた。

D　金融資本の支配

22　モルガンの大進出始まる

モルガンが内外投資家の信望を負うて鐵道界の再組織にまで大進出し始めたのは實にかうした巨人闘爭の赤熱期においてゞある。

これより先きモルガンはクーク商會沒落後の投資金融界で日の出の優勢を示し、七八年にはベルモントと組んで政府公債の引きうけを果し、漸くその名聲は世界的に認められてきたが、まだ、鐵道管理の支配にまで深く立ち入ることはなかつた。

が、かゝる鐵道界の大混亂は、最早、彼の默視を許さなかつた。

もし、こんな混亂狀態がそのまゝ續くやうならば米國鐵道の國際的信用は全く地に墜ちてしまひ、國際投資の仲介者としてのモルガン等の立場も失墜せねばならないであらう。

そこで彼は、けつ然奮起して、此の大渦卷きの、まつたゞ中に突入した。

彼は、すべての禍因を無暴な競爭政策にあるとみた。それ故、相互に、大局に着眼して、互讓的な協調政策を樹て、今迄の無理押し的な競爭を廢棄して、經營の內情を合理化しさへすれば鐵道界の信用も恢復できると考へた。

そして、又、今こそ、かゝる平和的協調主義への大旋回をなさねばならぬ危機がさし迫つてゐると考へた。

かくて、一八八五年彼は先づヴアンダビルト關係の亂戰を美事に解決せしめた。卽ち、ウエスト・ショーアをばヴアンダビルトへ、そして、サウス・ペンシルバニアをばペンシルバニアへ、夫々適宜に買收せしめ、こゝに彼の協調政策の雄大な第一歩を踏み出した。

つゞいて、彼は、瀕死の窮狀にあつた大會社、フィラデルフィア・エンド・リーヂングを整理し、之を再組織して甦らせた。即ち八六年に彼が主盟となつて一千五百萬弗の銀行シンヂケートを組織し、此の大會社の財政的建て直しを行つた。(此會社は後ちに再び破綻を暴露し遂に九三年の整理の際完全にモルガンの資本的支配の下におかれたのである)。

かうして、「鐵道の名醫」としてのモルガンの時代——從て又鐵道業の大金融資本化の時代が始まり出したのである。

23 プールから大合同へ

モルガンはつゞいてさらに大進出した。彼は今や徹底的に鐵道界の建て直しに沒頭しだしたのだ。

先づ彼は、八八年末から八九年にかけて、全國の大鐵道業者と大金融業者とをきう合して、平和的、合理的協調政策の協議會を催した。

此會議に參集する著——鐵道業者の側ではユニオン・パシフィックロック・アイランド、シカゴ・ミルウォーキイ・セントポール、ミゾリ・パシフィック、シカゴ・セントポール・キャンサスシチイ等を始め若干の大會社の代表者。又金融業者側ではモルガン商會の外に、ブラウン兄弟キダー・ピーボディ、ベヤリング、その他若干の大銀行團があつた。

モルガン自身は此會議によつて次のような協調政策を樹立しようと考へてゐた。

その主旨は…鐵道會社は從來のやうな無暴な賃率競爭を廢め、相互に紳士的態度で合理的協調を保ち、競爭線の建設も此會議のメンバーの贊成を得ないうちは之を實行せず、——そして銀行團は又此の協定に違反するやうな事業には金融的援助を與へず、萬一、協定を破る者のあるときは罰金を課する。…といふのであつた。

此の意見は大體承認されて、一つの非形式的な協定ができ、又その實行委員會のやうな機關も設けられた。

が、實際はといふと、此會合は失敗だつた。それは翌するに西部大鐵道業者がまだ、充分、高度の協調主義の必要を自覺しなかつたのと、モルガンの威壓力が彼等に迄浸透してゐなかつたゝめであつた。

それに、七八年に施行された州際商業法が、かうしたプール的協定の遂行を阻げたのだつた。

だが、モルガンは決して、之で挫折するやうなことはなかつた。否此失敗から、更に、ヨリ積極的な前進政策の緊要なことを痛感するばかりだつた。

それはなにぞ?——即ち、徹底的大結合網の樹立の一途あるのみ。

なぜといふに、彼はたゞ此の資本的强制力の把握によつてのみ、頑迷な鐵道業者を屈服して自己の所信を具體化することができるといふことを痛感したから。

そして、又此資本的合同によつてのみ、プール取締法の禁壓をのがれることができるから。

だから、此のプール政策の失敗——とりわけ又プール取締法は協定の形式を紳士契約から、財政的連鎖へ迄進出させる拍車となつたに過ぎなかつた。

24 金融資本の統制なる

かうして、モルガンが徹底的合同政策の決意をかためてゐたとき、丁度、その時に、かの一八九三年の大恐慌が襲來し、そして泥仕合に疲れてゐた大鐵道業者は相次で倒壞し、モルガンをして縱横にその整理的巨腕を振はしめ、一擧にその高度金融政策を遂行せしめたのである。

即ち、前述の通り

(1) 無煙炭用の大支配者リーヂングは一八九三年の三度目の破綻で徹底的にモルガン團の所有に歸し、

(2) 大ヴァンダビルトの全系統は一八八九年の二代ヴァンダビルトの死去で、統制上の實權は全くモルガン家に移り、

(3) 九四年にはサウザン・レイルウェイが、

(4) 九六年にはイリイが、

(5) 同年又アチソン・トペカの巨軀が、いづれも財政的破綻でモルガンの支配に歸した。

(6) 又ニュー・ヘヴンは建設當初からモルガン系の援助をうけてゐたが、漸く財政上の危機が、深化するにつれて、益々強くモルガン家の支配に服從せねばならなくなつた。

かくて、モルガンの鐵道支配——金融資本化の第一段階は一先づ完了したのである。前にもいつたやうに一八九三年の恐慌によつて大鐵道界はモルガンとロックフェラー、キュン・ロエブとに屈服してしまつたのである。

25 ヒル、ハリマンの對立と金融資本

二十世紀の劈頭を騷がせた、有名なノザン・セキュリティス(Northern Securities)の大結合運動は、いはゞ此金融資本化過程の最後の點睛的役割を持つものである。

此事件では表面には二人の大鐵道王、卽ちヒルとハリマンとが立役者として活躍したが、彼

等の背後には夫々モルガンとキュン・ロエブ——ロックフェラーとの强大な金融資本團が糸を操つてゐた。卽ち、ヒルもハリマンも、も早、單純な產業資本家として、かゝる華々しき立役者の配役をつとめることはできなかつたのであつて、たゞ大金融資本團と緊密に結合し、その御先き棒としてのみ、此舞臺に登場することが許されたのである。

だから、此全事件の史的意義は、も早、金融資本對產業資本の鬪爭ではなくして、大金融資本相互の最後の爭覇戰だつたのである。

否、たゞに、此大事件だけではない。九十年代後半の最大の鐵道王としてのヒルとハリマンとの全活躍はすべてモルガンとキュン・ロエブとの背景を負つて始めて理解されるのである。

時代は、既に、完全に金融資本の支配期に入つてゐたのだ。

ヒル(James H. Hill)とハリマン(Edward H. Harriman)とは九十年代以後に北と南とで對立した兩花形である。

ヒルは一八三八年農家生れの貧しいクラーク育ち、次第に、いくらかの貯金をこさへて運搬業を始め、又燃料業に手を染めた。一八七五年には小さいながらもナショナル・フューエル會社の統率者になつた。

丁度此頃クーク商會の始めたノザン・パシフイックが窮狀に陷てゐたが、ヒルは先づ、其姉會社なるセントポール・パシフイックを手に入れ、更に刻苦してこれを大擴張させた。そして一八八九年になつて、全ヒル系鐵道の統制者としてグレート・ノザンを設立した。

一八七九年にヒルが始めてセントポール・パシフイックを手に入れた時は漸く四百六十哩の延長だつたのに、八九年にグレート・ノザンは二千八百哩の延長に達した程だつた。

一八九三年にノザン・パシフイックが又破綻を暴露して整理を必要としたが、ヒルは此機會にノザン・パシフイックにも大進出をなした。といふのは此會社は彼のグレート・ノザンの競爭線でもあつたから。また此頃シカゴ・バーリントンをも手に入れた。が、これらの財務的活躍はモルガンとの强固な結合によつてなされたのである。

一九一二年のアメリカ年鑑によるとヒル系統の大鐵道線は次の通り、二萬五千哩を越えてゐる。

	千哩
Great Northern	7.4
Northern Pac.	6.3
Chicago, Burlington	10.4
Colorado South	1.2
四社合計	25.4

此の中、グレート・ノザンは二十五會社を、ノザン・パシフイック、及びシカゴ・バーリントンは夫々二十會社を、コロラドも亦九社を支配してゐる。

ヒルの敵手ハリマンは一八四八年にやはり貧家に生れた。彼はニューヨークの株屋の小僧となり、七〇年には獨立して仲買人となつた。彼は生來の敏捷さで株屋仲間に畏敬をかち得つゝ、又ハドソン河の運搬業にも手を染め、七九年にはオグデンスブルグ鐵道の社長の娘と結婚して、此方面への進出の登龍門を得た。遂にイリノイス・セントラルの社長に愛されて、その副社長に拔てきされた。

これより先き彼の敏捷は既にクーン・ロエブの厚き信用をもかち得てゐた。

次で、彼の劃期的大進出が行はれた。それはキューン・ロエブの背景の下に整理後のユニオン・パシフイックを統率することになつたのだ。(一八九八年)

彼は此ユニオン線を本據として、しきりに各地方に支配の觸手を擴げて行つた。そして南方では美事にサザン・パシフイックを支配した。

彼は腹中三條の大横斷線を支配せんとする計劃を樹てゝゐた。その中南方線は此サザン・パシフイ

ツクによつて、又中央線はユニオン・パシフイツクによつて既に實行された。

そこで今や北方に進出して、ヒル・モルガンの手から北部横斷線の一つを奪取せんと企てたのである。

かくて、ヒル――モルガン國に對するハリマン――キュン・ロエブ團の大挑戰が行はれた。ハリマンは始めシカゴ・バーリントンを買收せんとしたが、それはヒル系の勢力强固で到底拔くことができなかつたので、一轉して、ノザン・パシフィックの買占めに向つた。

ヒルは勿論之に應戰した。そして、一九〇一年の五月一日からその九日までの間にノザン株は百十五弗から、一擧にして一千弗へと釣り上げられ、そのためにパニックを生じた。

結局妥協ができたが、總決算してみると優先株を含めた總持株ではハリマンが勝つたが、肝腎の普通株ではヒルが勝つた。それで統制權はやはりヒルの手に握られた。ハリマンは此挑戰には敗れたのである。

が、解決は更に一進展して、ヒル、ハリマン兩系の大融合體としてノザン・セキュリチイス

會社なる持株會社が組織された。そして、兩派とも、ノザン・パシフィック及びグレート・ノザンの持株を此新會社に提供して、その代りに新會社の株式を割り當てられることになつた。

新會社は一九〇一年の十一月に四億弗の株式資本で設立された。が、新會社は、すぐに監督官廳から違法の獨占體として起訴され、一九〇四年には大審院の判決で解散を命ぜられてしまつた。

だが、吾々は此の一連の巨人鬪爭事件からも、それがまもなく綜合的大獨占へ落ち付くの外にないといふことをおしへられるのである。

26　ハリマン鐵道王國の組織

ハリマンは實に二十世紀初頃の最大の鐵道王であつた。一九一二年のアメリカ年鑑によるとハリマン系の總延長は實に次の如き廣大さを示してゐる。

	千哩
South. Pac.	10.3
Union Pac.	3.8
Illinois Cent.	6.3
Baltimore Ohio	4.6
Central of Georgia	1.9
Oregon Rr. & Nav.	1.7
Oregon Short	1.6
S. Pedro	1.1
Cincinnati, Hamilton	1.0
Delaware, Hudson	0.9
九社合計	33.2

だが、一億六千萬弗の社債を發行してゐて、多數の會社を支配してゐる。此の總會社中にはオレゴン・レイルウエイやサン・ピドロやその他がある。

が、サウザン・パシフィック(二億七千萬弗)の巨軀も此のオレゴン・ショートにある持株でユニオン・パシフィックと結合されてゐる綜合社の一つである。

此サウザン・パシフィックも自身では一線をも所有せぬ處の大持株會社であつて、その支配する會社は四十二個、その資本は六億三千萬弗に上つてゐる。

全系統の總本部はユニオン・パシフィックにある。それは自身四千哩を經營する四億弗の大會立であるが、又二十八個の鐵道會社をも支配する。その他八個の會社にも參與してゐる。

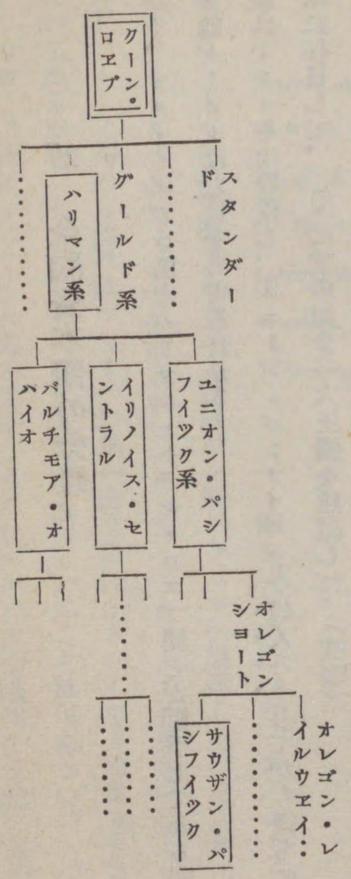
支配會社の中オレゴン・ショート・ラインが最大だ。之は資本は僅に二千八百萬弗

ユニオン・パシフィックとは別にイリノイスの大系統が、やはりハリマン團に屬してゐる。それは自身二千百哩を所有する外に三十五會社、四千哩以上を支配してゐる。

又バルモチア・オハイオ線も總計五十三會社を支配してゐる。

だから、以上の系統を圖表化すると次の如くである。

吾々は此のハリマン王國の系統圖からも米國鐵道業の持株的支配がいかに、數重的に、多數の會社を包擁してゐるかを窺ふことができるのである。



27　金融資本團の分野

かく、ヒル・モルガン團とハリマン・キュン・ロエブ團とが鬪爭してゐる間に七、八十年代の梟雄グールドはなにをしてゐたか？

彼はイリイを喰ひ荒し、ユニオン・パシフィックをほんろうしてから後ちには專ら南方線の支配に注目して、こゝに次の如き一大王國を建設した。（次表）

全系統の中心はミゾリ・パシフィックであり、それは自ら一千百餘哩を所有する外に三十一會社を支配してゐる。その孫會社の中には更に三十個近くの會孫を支配する者がある。

デンバー・リオ・グランデも亦二十個の會社を支配するし、ワバッシュも亦三十數個を支配してゐる。

たゞ、此グールド團はその擴張をいそいで、內部經營の合理化を怠つたゝめに、どの會社も概して財政的には窮狀に陷つてゐた。

	千哩
Missouri Pacific	4.2
Denver & Rio Grande	2.8
Wabash	2.7
Texas & Pacific	2.0
St. Louis & S. Western	1.7
International & G. Northern	1.2
Western Pac.	1.0
Wheeling & Lake Erie	0,5
七社合計	15.9

そして、一九〇八年の恐慌の際、遂にキュン・ロエブ團に屈服してその援助を仰がねばならなくなつた。

二十世紀の初頭になつてからムーア團（The Moore Brothers）が重工業から鐵道界へ進出してきた。

即ち、一九〇一年、かのユー・エス・鋼鐵トラストが成立して、その支配する大重工業會社を新トラストへ讓渡した。その年に、シカゴ・ロックアイランド・パシフィックを手に入れて大ロック・アイランド系統を建設したのである。

だが、ムーア團の背後にはベーカーの第一國立銀行とスパイヤー商會（Speyer & Co.）とが糸をひいてゐるから、之も、も早、獨立の產業王國といふことは出來ない。

かくの如く、殆どすべての大鐵道系が、多かれ少かれ大金融團の支配に屈服してしまつたの

に、獨り大ペンシルバニア鐵道系だけは今日まで依然として産業資本的獨立を保つてゐるといはれる。

それはペンシルバニア鐵道會社の資産だけで最近(一九二五年末)には實に二十四億弗！ に上る最大會社であるが、此外にもノーフーク・ウェスターンその他若干の大會社を支配してゐる。

リーフマンの著書によると全ペンシルバニア系の所屬鐵道は百四十個に上るといはれる。

ペンシルバニアは金融資本から獨立してゐるとはいふものゝ大金融團と全然没交渉なのではない。とりわけ、モルガン系のドレキゼルとキュン・ロエブとが二つながら、かなり緊密な關係をとり結んでゐる。たゞ、これらの金融團が、最後の支配權を把握するには到つてゐないだけだ。

*

かくて、吾々は十九世紀の九十年代から二十世紀の初頭にかけて大鐵道王國の地方的分野が

漸く確立されてきたことを知る。

それを、も一度綜括すると……

(1) ヴァンダビルト及びペンシルバニア兩系が北方の大幹線を、

(2) ヒル・モルガン系が北西部を、

(3) ハリマン・キュン・ロエブ系は中央横斷(ユニオン・パシフィック)線と南方横斷線を、

(4) グールドとムーア團とは南西部地方を、

(5) モルガンは亦南部地方を、

しかも、前にもいつた通り、ヴァンダビルト、ヒル等はモルガンと、ハリマン、グールド、スタンダード系はキュン・ロエブと夫々緊密に結合してゐるのだ。

即ち、ペンシルバニアを除いた、全系統が結局モルガンかキュン・ロエブかの支配に屬するのである。

そして此の大鐵道網の支配こそ、今や無限の致富の源泉となり、投資銀行團の實力は驚くべき發展をなした。彼等は此の大富源を擁して工業界の全面的支配へと乘り出して行つたのである。

その四　重工業の收奪

A　無煙炭田の收奪

B　大鐵山の收奪

A　無煙炭田の收奪

1　大鐵道と炭坑との結合

既に大鐵道業を征服した金融資本團は、此の運搬網の制御を通して、必然に多數の沿線上の大産業を收奪することができた。

モルガン及びロックフェラーによる無煙炭業の侵略はこの進出選拔の恰好な一例であらう。

周知の如く米國の無煙炭田はペンシルバニア州の北隅、サスケハナ河畔からニューヨーク州境へかけて集中的に産出される。

その産出量は次の通り擴大してゐる。

一八六一—六五年平均……一一・一百萬噸

七一—七五年 〃 ……二三・四
八一—八五年 〃 ……三六・二
九一—九五年 〃 ……五三・四
一九〇一—〇五年 〃 ……六六・九
一一—一五年 〃 ……八九・二

處が、此の炭田の開發は初めから大鐵道によつて行はれたのだ。卽ち旣に早く前世期の七十年代以前に、多くの鐵道線が此地方に進出し、それらは爭つて炭田を買收し、又は炭坑會社と緊密な結合關係をとり結んでしまつた。だから、單純な獨立炭坑會社は、それだけでは存續することが出來なかつたのだ。

2 鐵道炭坑會社のプール統制

一八七三年に大恐慌が襲來したときから、これらの鐵道—炭坑間に稍や注目すべきプール的協定が出來、その後ちは、低級ではあるが、たへず獨占的契約は更新されてきた。

プール割當率表

	1873–5年	1885年	1896年
	%	%	%
1)P. & R.(フィラデルフィヤ・リーヂング)	25.9	38.9	20.5
2)C. R. R(セントラル・レイルロード)	16.2		11.7
3)L. V.(リハイ・バレイ)	16.0	19.6	15.7
4)Lackawanna(ラツカワナ)	13.8	16.1	13.4
5)D. & H.(デラウエア・ハドソン)	18.4	11.0	9.6
6)Pa. C. Co.(ペンシルバニア・コール・コンパニイ)	(9.9)	5.0	4.0
7)Pa. R.R.(ペンシルバニア・レイルロード)		(8.0)	11.4
8)Erie(イリイ)		(1.5)	4.0
9)ソノ他小會社計			9.8

かうして、一八七三—九六年の間はいはゞプール的獨占期と呼ばれるだらう。

此期のプールの割當率を見るに、上表の如く、その大部分は鐵道—炭坑兼營會社に屬するのである。

3 モルガンのリーデング線奪取

此表中の最大の支配者たるフィラデルフィア・リーヂングの巨軀が一八八六年に一度モルガンの手で整理されて更生したものであることは前にも述べた。しかし、此最初の整理の際にはモルガンはまだ、此會社に資本的支配權を把握する程の深入

りはしなかつたのだ。

整理後此會社は一八九二年になつて大げさな炭田支配に進出し、リハイ・ヴァレイ鐵道を借入れ、又セントラル・ニュージァシイをも支配し、更に此セントラルを通じてラッカワナとも株式交換を行つた。

だから、實際は全參加率の七割がモルガン系のリーヂング一味によつて支配されてゐたのだ。

處が、此リーヂングの社長、マク・レオドは勢ひに乘じて、ニュー・イングランドの重工業品運搬をもその手におさめやうとし、モルガンのボストン・メイン線の繩張りへ侵入して行つた。

そこで、モルガンは怒つて、リーヂングへの金融を拒絶し、且つ他の一切の金融業者がリーヂングを援助することを妨碍さへした。

此モルガンの峻烈な金融的壓迫のためにリーヂングは忽ち、非常な窮狀に突き落され、一八九三年の恐慌期には破綻を暴露し、結局モルガンに徹底的に乘取られてしまつた。

モルガンの支配に屬した新リーヂングは一時リハイ・ヴァレイの借入れ契約を解除し、專ら整理につとめたが、九八年頃から、再び大結合運動を始め、セントラル・ニュージァシイを買收し、持株會社をつくつて、またゝくまに、全無煙炭量の六割三分を支配するに到つた。

4　全炭田の集中的支配

此頃になると一般に大會社への結合—買收は進んだ。やはりモルガン系に屬したイリイも亦ニューヨーク・サスケハナ・ウェスタンを買收し、同じくモルガン系の、ニューヨーク・ニューヘヴンもニューヨーク・オンタリオ・ウェスタンを買收した。

リハイ・ヴァレイは一時リイヂングから獨立してゐたが、その後ちに、再びモルガンの支配に歸屬した。

デラウェア・ハドソンはやゝ獨立的だが、やはりヴァンダビルトの支配を通じてモルガン系に屈服してゐる。

モルガンに對立するものでは、有力な大會社ラッカワナが早くからナショナル・シチイ—ロ

全產炭量中主要會社ノ占メル割合

	1900年 %	1907年 %	
1)P.&R.(リーヂング)	16.2	16.0	(モルガン系)
2)L.V.(リハイ・ヴアレイ)	6.1	10.5	(〃)
3)D.&.H.(デラウエア・ハドソン)	8.4	9.5	(ヴアンダビルト)
4)Erie		7.6	(モルガン)
5)C. R. R.(セントラル・ニユージアシイ)	9.9	9.8	(〃)
6)Lackawanna(ラツカワナ)	9.6	12.0	(ロツクフエラー)
7)Pa.R.R.(ペハシルヴアニア)	5.6	6.4	(ペンシルバニア鐵道)
(ソノ他略之)			

	產炭量 1907年 百萬噸	1926年 百萬噸
1) D. & H.	6.7	12.6
2) Reading	12.3	12.4
3) L. V.	6.7	12.0
4) Lackawanna	9.2	10.8
5) Erie	4.2	7.8
6) Pa. R, R.	4.9	6.6
7) C. R. R.	7.6	6.5

ックフェラー系に屬してゐる。

かうしてモルガン・ヴアンダビルトとロックフェラー系の鐵道會社とで相變らず全無煙炭田の大部分が支配されてゐる。

否、全產炭中鐵道支配の分は年と共は增加して行く。卽ち一九〇〇年には全體の六割二分だつたのが一九〇七年は八割近

くに上つてゐる程だ。

此大金融資本による獨占化の狀勢は最近にも變化はない。——たとへ、個々の會社の盛衰には多少の動きはあつたけれど。

B 大鐵山の收奪過程

大鐵山の收奪も、炭田のそれと同じく大金融團を背景とする運搬業との結合が重要な役割りを演じた。

のみならず、こゝでは鑛石をその儘外部へ賣り出さずに、自家の工場で精錬するのが有利であつたから、必然に大鐵鋼業者との縱斷的結合をも展開せしめた。

かくて、大金融團の支配下に大鐵山——大運搬設備（鐵道・汽船・ドック等）——鐵・鋼工場を連ねる處の長大な連鎖網が出現したのである。

1　シューペリオル湖鐵山の開發史

前世紀末年に於ける米國大鐵鋼業の勃興は、シューペリオル湖畔の大鑛山の開發を以て出發點とする。

次の數字及び圖表によつても分るやうに、湖鑛と銑鐵との生産はとりわけ八十年代の後半から急に併行的に激增し、九十年代から二十世紀の初頭にかけては、湖鑛の産額は益々增大して、遂に全所要鑛石の七—八割迄供給するやうになつた。

	銑鐵生産	湖鑛荷送高
一八六五年	八、三二千噸	二三六千噸
七三年	二、五六一	一、一六二
八〇年	三、八三五	一、九〇九
九〇年	九、二〇三	九、〇〇四

一九〇〇年	一三、七八九	一九、〇五九

そこで、此湖鑛の開發史を、も少し、詳細に說明すると、それは大體次の三期に區劃して考へることができる。

(1)第一期は一八七三年以前の初期開發時代——これは、ただ試驗的の小規模採掘時代である。

(2)第二期は七三年から九三年の二十年間——や、大規模企業への過渡時代。既に現代的大經營化の土臺はできたけれども、尙ほその徹底的完成には到らない。後年の大飛躍の準備期である。

(3)第三期は九三年以後の大資本化と集中化の時代。(こゝでも九三年の恐慌が大結合化の劃期となつてゐる)。

此期の始めに、かのメサビ新鑛帶が開發されてシュペリオル湖鑛の優越を確立した。そして湖鑛事業の中心が急速に此メサビ鑛帶へと移つて行つた。

實に此の豐富で、採掘し易きメサビの開發こそかの劃期的な大量生産技術を促進したもので

ある。

そして、それとともに、必然に又大量運搬の新技術が完成された。

湖畔の鑛山から、大湖の汽船へ——→汽船から又鐵道へ——→そして、最後にピッツバーグその他の大鐵工地への獨特な大量的・迅速的運搬、その積換へ、その貯鑛等の驚くべき大機械的新技術が發展して行つたのだ。

その結果、これらの高價な新技術をも支配せずにはも早、單純な鑛山會社だけでは——よし、どれ程大規模であらうとも——强固な生存を續けることはできなくなつてしまつたのだ。

そして鑛山・鐵道・汽船の三者を結合的に支配する處の大綜合會社のみが始めて、よく强固な生存權を要求し得ることになつたのだ。

それ故、吾々は、こゝでも、大交通機關と鑛山との結合の强味を見出すのである。

私はこゝに此潮鑛事業の技術的設備の内容に就て一々説明してゐる譯には行かぬが、その效果を語る處のほんの二、三の數字的材料を指摘すると……

(1) メサビ開發の結果採掘上の機械化が大げさに行はれて、勞働者一人當り年産品は一八八九年の三百八十五噸から、一九〇二年には九百十五噸！へと激增した。

(2) 一鑛山當り生産品は一八七三年には三萬噸、九二年には十萬噸をだつたのが、九八年には二十萬噸！へと上つた。

(3) 鑛山鐵道は木造二十五噸車から鋼鐵製五十噸車へ移り、湖港のドックも十四呎の水深が七十三呎！に上り、湖上船舶は一八九〇年の最大三千噸から、九八年の一萬噸へと進んだ。自働積換機ができて、積換速度と能力とは面目を一新した。……

2 湖鑛事業の金融資本化過程

そこで、此の湖鑛事業への金融資本化過程をみやう。

吾々はこゝでは（イ）先づロッフェラー團の大進出を、（ロ）次でカーネギイの進出を、そして、（ハ）ロックフェラー・カーネギイの大結合を、（ニ）それから大北鐵道（グレートノザン）によるヒル・モルガン

團の進出と、フェデラル製鋼所によるゲーリイ・モルガン團の進出とを、(ホ)そして最後にモルガン支配下のユー・エス・スチール・トラストの綜合的支配へ——といふ一連の展開を見出すのである。

先づロックフェラー團の大進出から說明して行かう。

3　一八九三年の大恐慌とロックフェラーの大收奪

今述べたやうに、湖鑛開發の大發展は一八九三年のメサビ鑛帶の開拓と共に始まる。その前に、も既に漸次大企業化への準備はできてゐたが、これを機會に躍進的大發展が始まつたのだ。處が、此年は例の大恐慌の襲來であつた——それに今低廉な新鑛石があらはれたのだから、鑛石の市價は實に崩落した。

卽ち舊鑛山のベセマー第一號品は一八九二年の五弗半から九七年には約三弗へと下つた。メサビ鑛は九四年二弗半、九七年には二弗二十仙の安値を示してゐる。

こんな狀態だから舊來の鑛山會社は多大の打擊をうけて、財政的に窮狀に陷てしまつた。

ロックフェラーがメサビへ大進出し、一擧にして、湖鑛開拓の大先驅者たるメリット家(The Merritts)の全事業を安値で强奪してしまつたのも全く此の恐慌につけ込んだからである。

此メリット家は早くからマウンテン鑛山その他の豐富な大鑛山を經營し、又ダルース・ミッサビ・ノザン鐵道をも所有して盛大に事業を營んでゐたが、その事業資金はロックフェラー家から借り入れてゐた。ところが、此恐慌で債務の辨濟に行き詰り、全くの棄て値で全資產をロックフェラーに奪はれねばならなかつたのだ。

メリット家の持ち山の埋藏量だけでも、少くも七千五百萬頓からあるし、鐵道設備だけでも數百萬弗の値打ちはあつたのであるが、ロックフェラーは僅に百五十萬弗に足らぬはした金で之を全部强奪してしまつたのである。

ロックフェラーは、此の機に乘じて、他の鑛山をも同じやうな安値で、ふみ倒して、更に、約一億頓からの大資源を二百五十萬弗足らずの金で奪取してしまつた。

かくて、翌九四年末にはロックフェラー家はメサビ鑛帶の西半部に牢乎たる大寶庫を所有するやうになつたのだ。

ロックフェラーはその全鑛山を經營するために資本金三千萬弗のシュペリオル湖合同鐵山會社（Lake Superior Consolidated Iron Mines）を設立した。

同社は大鐵道を持ち、又ベセマー汽船會社を通して、二十二隻の鑛石運搬船をも持つて、完全に自給自足的に鑛石をクリーヴランド迄搬出することができるやうな最も現代的な大會社となつた。

4　カーネギーの進出とロックフェラー團

カーネギイの湖鑛への進出は少しく立ち遲れてゐる。彼は始めのうちは鑛石は自給するより購入する方が有利であるといふ方針を固執してゐたので湖鑛への進出を閑却してきたのだ。

だが、やはり、此九三年の恐慌の一寸前に、オリバー採鑛會社（Oliver Iron Mining Co.）に資金を供給して、その株式に參加することになつた。

そして、出發こそ、多少遲かつたが、一旦採鑛に手を染め始めるや疾風的に大擴張を行つた。大恐慌のために、多くの會社が、いづれも事業を手びかへてゐる間にオリバー會社のみは熱心に開發を進め、九六年――即ち不況のまつ際中ですら年產八十一萬頓の記錄をつくつた程だつた。

だが、カーネギイ鐵鋼會社の厖大な生產力にとつてはオリバー會社の鑛石だけでは到底不充分だつたから、カーネギイは更に他會社への侵略を企てた。そして、必然に最大會社たるロックフェラーの合同鐵山會社に着目した。

そして九六年末にカーネギイ・オリバー・ロックフェラーの結合契約が成立したのである。

それは頓當り二十五仙の低廉な地代で、五十年間に亘り、毎年最低六十萬頓以上の巨額の年產量を保障する處の、大鑛區の租借權をロックフェラーからカーネギイに與へたのである。

此の契約の結果カーネギイはオリバー鑛山の分と合せて、毎年百二十萬頓を下らぬ鑛石を確保することができたのであるが、當時カーネギイは運搬設備を全く缺いてゐたから、それは全

部ロックフェラーの設備を利用せねばならなかつた。

これより先きロックフェラーは自ら製鋼所を建設してカーネギイと覇權を爭はんとする計畫があり、又カーネギイの側でも鑛石運搬事業に大擴張を企てゝゐた。

だから、此の新契約はロックフェラーの製鋼進出とカーネギイの鑛石運搬進出とを相互に讓歩しあつたところの大妥協的掛け引きの所産なのである。

カーネギイは之を機會にして更に舊鑛山地域にも大進出をなし、一擧にして莫大な資源を手に入れることができた。

その結果、今ではカーネギイ會社の鑛石原價は競爭會社に比べると、はるかに割安になつたのだ。

5　モルガン系の進出

モルガン系は二つの途から進出してきた。一はゲーリイの支配するフェデラル製鋼所から、

他はヒルの大北鐵道から。

カーネギイの鑛山進出は、必然に、他の競爭會社をも同じ進出へと狩り立てた。そして、フェデラル製鋼、ナショナル製鋼、アメリカ鋼鐵・線、リパブリック鐵鋼、等の大會社は多かれ少かれ湖鑛の資源を爭つて手に入れた。

とりわけ、フェデラル製鋼所はミネソタ鐵山會社（Minnesota Iron Co.）の大資源を確保してゐるので此點でもカーネギイ會社の强敵手であつた。

此フェデラル製鋼所は後ちにも說くやうに、一八九八年にイリノイス製鋼所を中心とする數個の大會社の結合體として成立したもので、モルガンの資本的支配の下にあり、彼の腹心たるゲーリイ（後年ユー・エス・スチール・トラストの首領となつた）の直接の管理に服するものである。

處が、此のイリノイス製鋼所は早くから原料自給の方針を立て、ミネソタ鐵山會社をも支配

してゐた。そして、此ミネソタ鐵山會社もロックフェラーやオリバーと同じく九三年以來の不況期に盛んに積極的進出政策をとり數百萬弗を投じて、厖大な資源を確保してゐたし、又十數隻の運搬船を持つてもゐた。

ジェムス・ヒル――かのモルガン系統の大鐵道王たる――の大北鐵道が、湖鑛所有に進出したのは最も遲れてゐて、一八九八年からであるが、同年一擧にして四百萬弗を投じてライト・エンド・デビスの大資源と鑛山鐵道とを手に入れてしまつた。此の取り引きも、法外の安値であつたといはれる。が、金融に行き詰つてゐた鑛山主が喜んで、その厖大な資源を棄て値で投げ出したのに變りはない。

ヒルは更に百萬弗を投じてダラス・ウィニペグ鐵道を手に入れ、尙ほ本世紀に入つてからも、盛んに、その資源を擴大して行つた。

×

かくして、他の場合と同樣此の鑛石事業でも、九十年代の後半の僅々數年間にロックフェラ

ー、カーネギイ、モルガン、ヒル等の大資本團が一擧にして大資源を奪取してしまつたのだ。しかも、彼等は初期開發時代には事業の危險をおそれて、全く手出しをせず、一旦、その輝かしき前途の見込みが確實になるや否や、卒然とおそひかゝつて、一朝にして小資本的開拓者からその失驅者的苦鬪の成果を收奪してしまつたのである。

他の場合と同じやうに、こゝでも大恐慌と資本の缺乏とが先驅者を疲弊させ、その寶庫を法外な安値で、あけ渡さねばならなくさせたのである。

6　ユー・エス・鋼鐵トラストの出現

だが、一九〇一年のユー・エス・スチール・トラストの成立によつて大金融的支配の最後の展開が完成した。それは後ちに說くやうに、カーネギイ、フェデラル、ナショナル、アメリカ鋼鐵・線、その他の諸製鋼所やロックフェラー所屬の大鑛山事業等を、すべて、綜合的大結合體にまで融合してしまひ、此の新しき王座の上に、わがモルガン王が君臨したのである。

だから、前述したロックフェラーの合同鐵山も、カーネギイのオリバー會社も、フェデラル

のミネソタ鐵山も、今は、すべてモルガンを盟主とする一大トラストに合流して、統一的支配に服するのである。

そこで全湖鑛積出し量中、ユー・エス・スチールの占める割合を見ると……

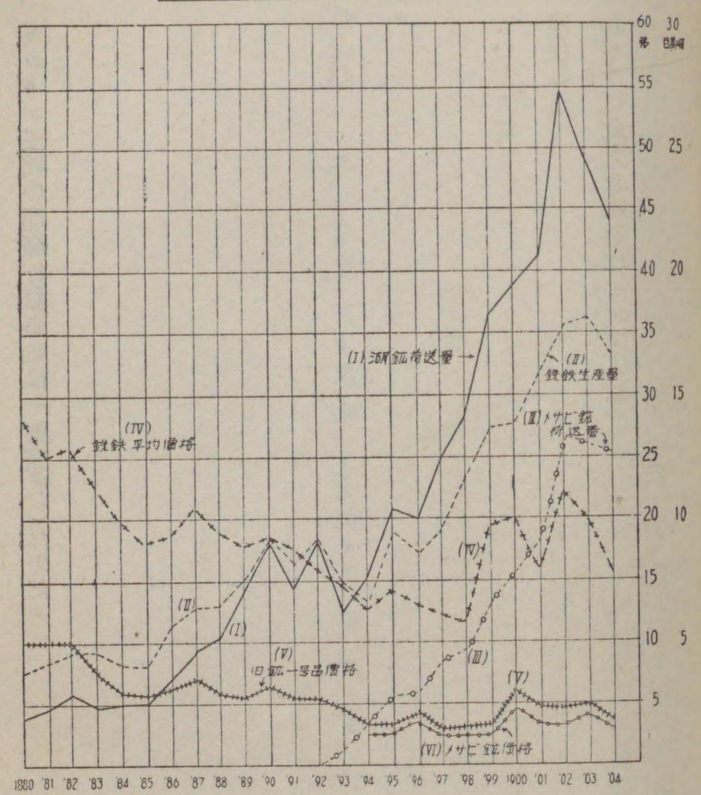
	一九〇二年	一九〇三年
全湖鑛	百萬噸 二七・六	百萬噸 二四・三
ユー・エス・トラスト	一六・一	一五・四

であつて、實に全體の六割以上に上つてゐる。のみならず、その千哩以上の鐵道網と百十餘隻の湖上運搬船とを以て、完全に運搬設備を自給してゐるのである。

又同社以外の最大の獨立會社たる大北鐵道系鑛山とは一九〇六年に大規模な借鑛契約を結びその資源をも確保した。

前にも述べたやうに此大北鐵道はヒル家の事業で、モルガンとは甚だ親密な關係に立つものなのである。

銑鐵及ビ鑛石生産ト價格



かくして、モルガン王朝の湖鑛征服事業は一應完成したのだ。

その五　ユー・エス・スチール・トラスト

鐵道業を別にすれば、大鐵鑛業の支配こそはモルガン家の最大の事業である。こゝではモルガンは精鋭な大産業王カーネギイの强陣と對立し遂にそれから支配權を奪取してしまつたのだが、此成功によつて、世界的金融資本王モルガンの實權が確立されたのである。

1　八十年代の鐵鋼業

米國に於ける鐵鋼業の發展は、前にも一言したやうに八十年代の後半以後に飛躍的であつた。それを生産高で示すと

	銑鐵	鋼鐵
一八七六—八〇年平均	二、〇〇〇千噸	八一〇千噸
八一—八五年〃	四、二六〇	一、六五〇
八六—九〇年〃	七、〇八〇	三、二九〇
九一—九五年〃	八、一三〇	四、六七〇
九六—一九〇〇年〃	一一、四九〇	八、四五〇

一九〇二年　一八、〇〇〇　一四、九四〇

かく八十年代の後半から事業の擴大するにつれて、漸次厖大な大企業があらはれ、企業結合の傾向も進んできた。

とりわけ、それは銑鐵及び粗鋼を中心とする基礎部門にあらはれた。

試に、九十年頃の代表的大企業を拾つてみると

北西部には一八八九年に創立されたイリノイス製鋼所があつた。之はシカゴ及其附近の重要な鐵鋼會社の綜合體で當時製鋼能力年七十五萬噸、公稱資本二千五百萬弗であつた。九二年カーネギイ製鋼所が組織を改めたが、此時その製鋼能力は百二十萬噸に達し、總て其工場はピツツバーグに集中され、最新式の設備で武裝されてゐた。且つ同社は既に此時よりコンネルスビル地方骸炭の最大生産者たるフリック骸炭會社に支配權を有して居た。其他同地方にはジョンス、ラフリン團の重要なる二會社があり、其資本は約五百萬弗であつた。

東部地方には九二年にラッカワナ製鋼會社が創立された。又早くよりペンシルヴァニア製鋼

所あり、尙キャンブリヤ製鋼所、ベスレヘム製鋼所等があつた。

西岸地方には九二年に二大會社の合同にてコロラド燃料及鐵會社（資本金千三百萬弗）が成立し、南部にはテネシイ石炭、鐵及鐵道會社あり、共に石炭及銑鐵を盛に生産したるも此頃は尙ほ製鋼業には手を染めなかつた。

是等は皆粗鋼又は重鋼品の製造會社のみにて、其他の加工的精製品は偶々 Consolidated Steel & Wire Co.（一八九二年創立、四百萬弗）の如き大會社もあつたが、概して多數の孤立的小會社によつて競爭的に製造されて居た。

鑛石業も略ぼ同樣で、既にミネソタ鐵會社（八二年、千萬弗）及シュペリオル湖合同鐵鑛會社（九三年、三千萬弗）等の大會社も在つたが、概して言へば尙ほ競爭的時代であつた。

此時期に於ける他の特徴は、單純會社卽ち原料を購入する會社が多數だつたことである。先づ鑛石から言ふならば、東部地方では製鋼所が鑛山を所有する實例は尠くなかつたが、湖鑛の厖大なる資源は單純なる採鑛會社の所有に屬し、鐵鋼會社が自ら充分なる鑛石を所有する事は尙ほ稀であつた。

銑鐵の大部分は又所謂商人爐（マーチャント・ファネス）の製造する處にて、其製品は自己の工場にて使用されず、外部に賣却された。從て、大製鋼會社中にも所要銑鐵の大部分を購入する者が多かつた。製鋼工場は上記の如く比較的に集中されて居たが、精製工場は多くは其粗材を購入した。又運搬設備を自營する工場は殆どなかつた。

然し當時と雖も多少の縱斷結合體の實例がなかつたのではなくして、東部、及南部の如く原料が相互に接近せる地方では既に相當に混合會社の萠芽を見出だすのである。之に反して湖鑛とコンネルスビル炭とを原料とする地方では原料を自給する爲めには巨額の資本を要したためと、當時はまだ原料生產者間に競爭が行はれて、低廉に購入し得る便宜があつたためとで、概して混合的組織はあまり發達してゐなかつたのである。

かゝる狀態が九十年代初期の大勢であつて、いはゞまだ分散的競爭時代であつたのだ。

2　九十年代の結合・集中運動

が、それは丁度集中期への過渡時代であつて、一八九三年の恐慌襲來とともに、此の大結合化が迅速に發展し出したのである。

一八九三年後の恐慌期は前述せる如く原價の改善を急務とした。諸種のプールの效果が精々一時的に止まり、且つ法律の明白な禁壓をうけてからは競爭精神は全部門に滲透した。新武器の獲得は原料資源の買收競爭となつた。イリノイス會社がペンシルヴァニアに大炭區を、又湖鑛地方に大鑛區を有し、且つミネソタ鐵會社を支配したのと、カアネギイ會社がフリック骸炭會社及びオリヴァ採鑛會社を支配したのとは新傾向の先驅であつた。然しカアネギイの當時の方針は尙ほ採鑛事業を以て甚だ危險不利なりとしたのであるから、所要鑛石の大部分は購入しつゝあつたのである。其方針を一變したのが前述の如く九六年以後であつて、之が急速なる大企業組織の發達を促したる導火線ともなつたのである。

カネアギイ會社の新方針は競爭會社をして自衞的に其例に倣はしめたが、中にもイリノイス

社名	創立年	株式(公稱) 優先 百万弗	株式(公稱) 普通 百万弗	社債 百万弗
1) Am. St. & Wire Co. (Illinois)	1898	12	12	—
2) Am. Tinplate Co.	〃	20	30	0.3
3) Am. St. & Wire Co. (N. Jersey)	1899	40	50	0.1
4) Am. St. Hoop Co.	〃	14	19	—
5) National Tube Co.	〃	40	40	—
6) Am. Bridge Co.	1900	35	35	0.2
7) Am. Sheet Steel Co.	〃	26	26	2.0
8) Shelby St. Tube Co.	〃	6	9	—

製鋼所は、九八年に遂にミネソタ鐵會社其他と合併して、フェデラル製鋼所を組織し其他の大會社中にも原料自給の急務を解決せんと熟議する者が多かつた。かくて、カアネギイ會社の原料自給策は固より九八年以後の大混合會社發達運動の主因と見るべきではなく、夫れ自身當時一般産業界に存在したる諸狀勢の結果ではあつたが、次第に成熟しつゝありし此種の結合的傾向に對して、有力な刺戟を與へて促進劑となつた影響は實に重大なものといふことができやう。

かくの如く一方では粗材部門の競爭的結合が行はれると同時に、精製部門では獨占的トラスト化運動が急速に發展した。

それも九十年代中葉の不況が一轉して証券市場の購買力が旺盛になると、一擧に、またたく間に、主要部門に獨占的結合が成立した。

試に一八九八年から一九〇〇年の間に成立したこれらの精製品の獨占組織を列記すると、前表に示すが如く八箇が數へられる。

これらは何れも、夫々その名の示す部門の獨占體なのである。

3　粗材會社と加工會社との對立——その財閥關係

斯くて此好況の三年間を通じて粗材生産は少數の混合的大會社に集中され、又精製品の領域には夫々の部門毎に略ぼ獨占的の一大會社が成立した。然し是等の相互に依存する二大部門を縱貫的に連結せる組織は未だ完成せずして、夫々獨立、對峙して居たから基礎部門にとつては確實な販路の點で、加工部門にとつては低廉なる原料の點で何れも不安なる一時的平衡狀態に

あるを免れなかつた。好況が續く限り、此の平衡は保たれたが、一九〇〇年の春から反動的沈衰が來ると必然に安定が破れてしまつた。

そこで、もう少し、立ち入つて、此の對立關係を述べておかう。

説明の便宜のために以下粗材生産者の一群を第一次團、加工業者の一群を第二次團と呼ぶことにする。

第一次團はカアネギイ會社、フェデラル製鋼所、及ナショナル製鋼所等で、是等は皆原料を自給し、又運搬設備をも有して居たが其製品たる粗材は外部に販賣して居た。

第二次團はアメリカ鋼鐵及線會社、ナショナル管會社、アメリカ鉱力會社、アメリカ薄板鋼會社、アメリカ鋼帶會社、アメリカ橋會社等で、是等は夫々其部門の獨占體ではあるが、原料は皆大部分第一次團の供給に俟つて居た。

地域的にいふとフェデラル製鋼所は北西部にあつて、アメリカ鋼鐵・線會社に線材を供給し、又ナショナル・管、及びアメリカ製橋會社に粗鋼を供給してゐた。此三者は又何れもモルガン

系統に屬してゐた。之に對してカーネギイ製鋼所はピッツバーク所在の第二次團に粗材を供給してゐた。

ナショナル製鋼所はいはゆるムーア系統の所屬會社である關係から、同じ系統の加工會社たる鉱力、薄板、及鋼帶の三トラストへの原料供給を獨占することができた。

かくして、一つは地理的隔離のためと、一つは特別の財的連鎖のためとで不安ながら、競爭は回避されてゐたのである。

次に財閥的系統からいふと

第一にモルガン團は此大結合の際、フェデラル製鋼、ナショナル管、及アメリカ製橋の三會社に有力な支配權を把握することができた。

第二にムーア團はナショナル製鋼、及び鉱力、薄板、鋼帶の四社を支配してゐた。

第三にカーネギイ團は根本的には、どの加工會社とも關係はなかつたが、その最も卓越した生産力で自然に他の競爭會社を壓迫してゐた。